

滇西の劍

今村啓爾

はじめに

滇西¹⁾ (てんせい) とは中国雲南省の西部、滇池地区よりも西の一角をさす言葉である。この地域からは雲南の中でも独特の風貌を有する青銅器が多く出土している。筆者が先 I 式 (プレ I 式) と呼ぶ銅鼓と小論の主題である或る種の劍はその代表とってよいであろう。四川、雲南の劍については、すでに高浜秀氏²⁾、童恩正氏³⁾ のすぐれた研究があり、昨年 (1983)、張増祺氏⁴⁾ は滇西地区の青銅劍に限定した論文を発表している。これらの諸論文によって、滇西の劍についての大綱はすでに固められたとってよいが、筆者にも意見を異にする部分、つけ加えるべき点がないわけではない。土器編年による最古の一群の劍の指摘と中国北方の劍との関係、現在までに雲南で出土した青銅器の分布にみられる極端な西古東新の傾向の問題、劍の編年による銅鼓編年の確認、雲南における鉄器普及の時間的傾斜などである。

本論に入る前に筆者が滇西の劍に特別な興味をもつに至ったいきさつについてふれておきたい。1973年に筆者は東南アジアと中国南部の銅鼓について型式的、編年の整理を行ない、ヘーガー I 式に先行するものとして先ヘーガー I 式 (プレ I 式) を抽出し、またその祖型を青銅製容器の倒置に求めた⁵⁾。その後中国でも筆者とは別に先 I 式に相当する概念 (汪寧生氏の A 型⁶⁾、李偉卿氏の I 型 A 式⁷⁾、王大道氏・肖秋氏の万家壩類型⁸⁾、張世銓氏の万家壩式⁹⁾、胡振東氏の雲南型 I 式¹⁰⁾ が提出され、火にかけられた跡のある楚雄県万家壩銅鼓群¹¹⁾ の発見などによって、その起源を青銅製容器の転用に求める考えも定説に近いものになってきたようである¹²⁾。近年における先 I 式銅鼓の相次ぐ発見は、雲南の大波那¹³⁾ とヴェトナムのトゥン・ラム (Tung Lam)¹⁴⁾ —— 筆者は梅原末治氏の資料に従ってチョボ (Cho Bo) 鼓¹⁵⁾ と呼んだが、これは記録に混乱があったらしい¹⁶⁾ —— で各一面が知られていたにすぎない1973年当時には予想もできなかったことで、これによって、名称の不統一はあるものの、先 I 式銅鼓の概念は不動のものになったとってよいし、先 I 式と I 式の間接的な銅鼓 (曲靖八塔台鼓)¹⁷⁾ は先 I 式から I 式への変遷を跡づける資料となった。

しかし、資料の増加はまた新たな問題をも生み出している。先 I 式銅鼓が、従来は I 式銅鼓の分布圏の縁辺部と考えられていた滇西地域から集中して出土していることはその最大のものである。その分布図 (Fig. 1) を見るならば、誰もが先 I 式銅鼓が実はヘーガー I 式に並行する地方的な、

古い形を残す銅鼓にすぎないのではないかという疑念を懐くであろう。実際、ヴェトナムのパム・ミン・フエン (Pham Minh Huyen) 氏は万家壩鼓に代表される先I式銅鼓をドンソン文化後期に並行する地方的な銅鼓にすぎないと主張している¹⁸⁾。

この疑問に対して中国の研究者たちはまったく強気であるように見える。先I式とI式は時間的にオーバーラップする部分があるものの、基本的に前者が後者より古いということは一致した見解であり、先I式銅鼓の年代を放射性炭素年代測定値によって紀元前7～4世紀とすることも一致している。しかし、I式銅鼓のはじまりについては、李家山21号墓の放射性炭素年代によって非常に古く考える王大道氏、肖秋氏らの考えと¹⁹⁾、李家山の放射性炭素年代に疑問を示し、せいぜい戦国後期までしかさかのぼらないとする童恩正氏の考え²⁰⁾があって、ここに意見の不一致がみられる。もし、前者の立場をとるならば、先I式がI式に先行するという主張自体に影響が及ぶことになる

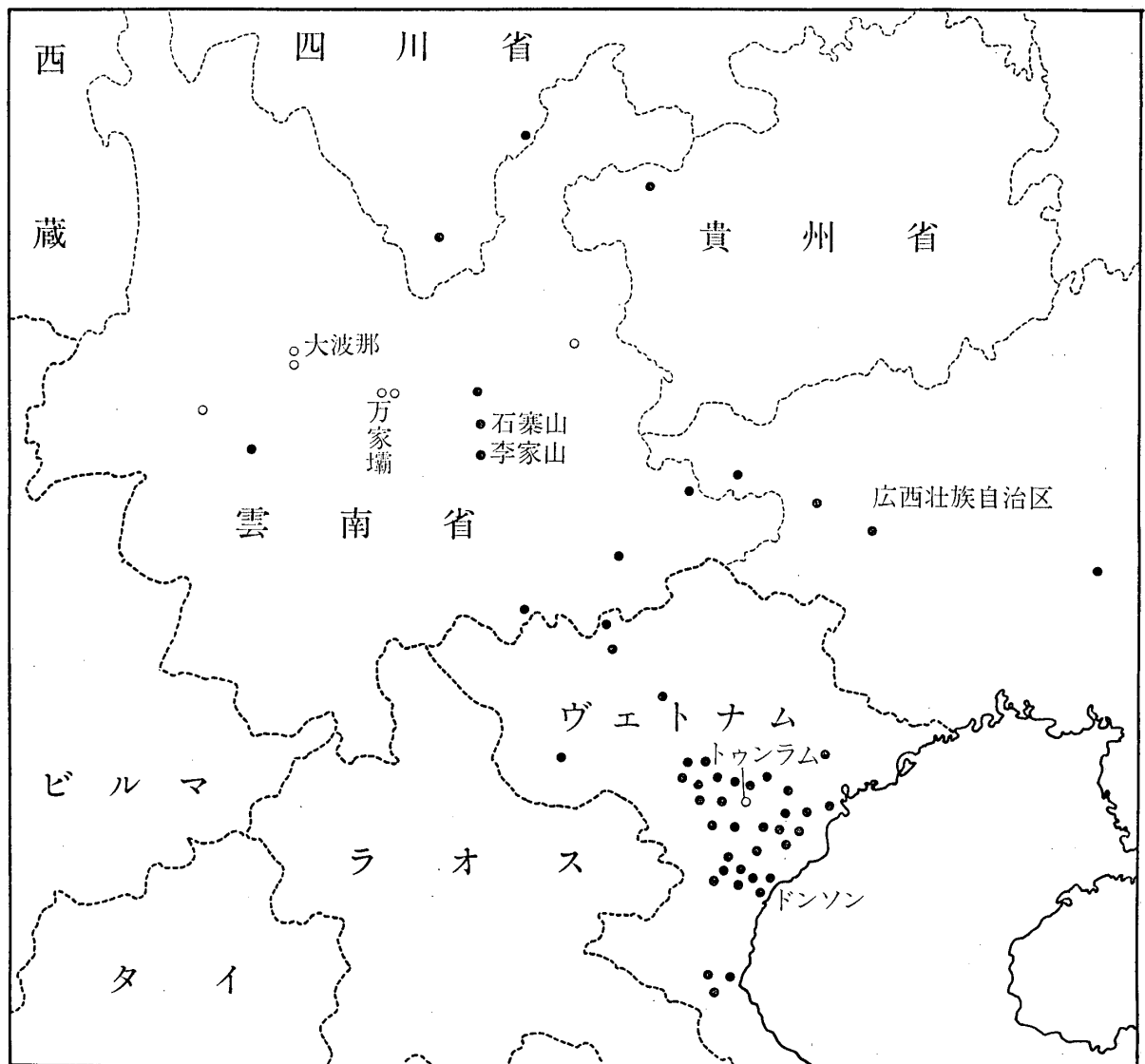


Fig.1 先I式銅鼓 (○) とヘーガーI式銅鼓 (●) 発見地

滇西の劍

Table 1 小論に關係する遺跡の放射性炭素年代測定値

遺跡名	研究室整理番号	資料	半減期5730年	半減期5570年	樹林較正年代
祥雲大波那木槨銅棺墓	ZK-231	木槨	465±75 B. C.	400±85 B. C.	495±75 B. C.
祥雲大波那2号墓	BK-79094	木槨	1060±100 B. C.	975±160 B. C.	1220±75 B. C.
楚雄万家壩1号墓	ZK-373	木材	425±80 B. C.	360±80 B. C.	450±90 B. C.
〃	BK-76053	木材	400±85 B. C.	330±85 B. C.	415±95 B. C.
楚雄万家壩23号墓	ZK-374	木材	455±80 B. C.	390±80 B. C.	480±90 B. C.
〃	BK-76054	木材	690±90 B. C.	615±90 B. C.	765±135 B. C.
〃	WB-77-8	木材	685±80 B. C.	610±80 B. C.	760±130 B. C.
李家山21号墓	ZK-294	木柄残片	625±105 B. C.	550±105 B. C.	685±145 B. C.
徳欽納古2号墓	ZK-657	人骨	950±100 B. C.	865±100 B. C.	1085±130 B. C.
寧濱大興鎮9号墓	ZK-759	棺木	510±80 B. C.	440±80 B. C.	550±90 B. C.
劍川海門口	ZK-10	円木杭	1150±90 B. C.	1065±90 B. C.	1335±155 B. C.

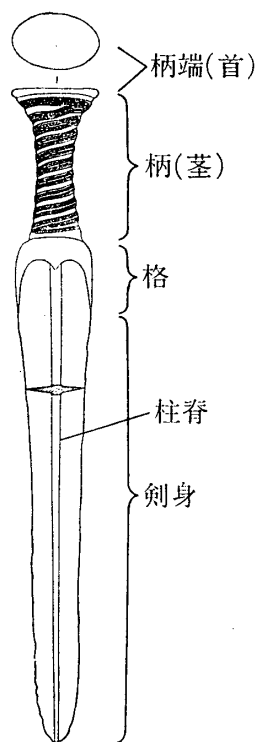


Fig. 2 小論で用いる劍の部分名称。()内は「周礼」考工記「桃氏為劍」の記事によって中国で一般的に用いられる名称

し、後者の立場をとるならば、ではなぜ李家山の年代だけが誤りで、他の年代は正しいといえるのかが問題になる。Table 1²¹⁾に見るように、同じ万家壩の23号墓について測定された複数の年代の中には、250年も離れたものがあるし、当初の報告²²⁾で第Ⅰ類墓とされた万家壩1号墓と、第Ⅱ類墓とされた23号墓の放射性炭素による年代は逆に出た。(本報告²³⁾では1号墓、23号墓ともに第Ⅱ類墓とされた)。

結局のところ、このような細かい年代関係を放射性炭素年代によって議論すること自体が無理なのだと思えるをえないのである。

銅鼓編年の当否を論じ、さらに雲南青銅器文化の変遷過程を正しく把握するためには、銅鼓以外の材料によって、編年的整理を進めることが必要になるのである。

筆者は1979年に、それまで知られていた先Ⅰ式銅鼓を整理し、その編年の補助として、青銅製の鋤に、大波那→万家壩→石寨山の連続的变化が認められることを指摘した²⁴⁾ことがある。しかしこれも十分とはいえない。なぜなら、遺跡もこの順に西から東へ並んでいるので、地域性のあらわれとみられないこともないからである。次いで着目したのが滇西の劍である。

1 山字形の格を有する剣の編年

滇西の剣の主体をなすのは、柄が中空で山の字形の格を有するもので、童恩正氏はこれをC I式と呼び、張増祺氏はA型～E型として分類し、編年している。

童恩正氏による編年²⁵⁾

(Fig. 3)

童恩正氏は四川、雲南の剣を概観する論文の中で、滇西に多く見られる銅剣をC式としたうえで、柄が空心で格のないものをC I a式(1)、これに山字形の格のついたものをC I b式(2, 3)、格の部分が大きく発達し、縦線の間格子状の文様が発達したものをC I c式(4)とし、この順序で変遷し、次いでC I c式と同じ形制の銅柄鉄剣(5)が生じると論じた。これは滇西の剣の変化の基本を最初に指摘したものである。また、永勝県龍潭出土の格自体の上に文様が

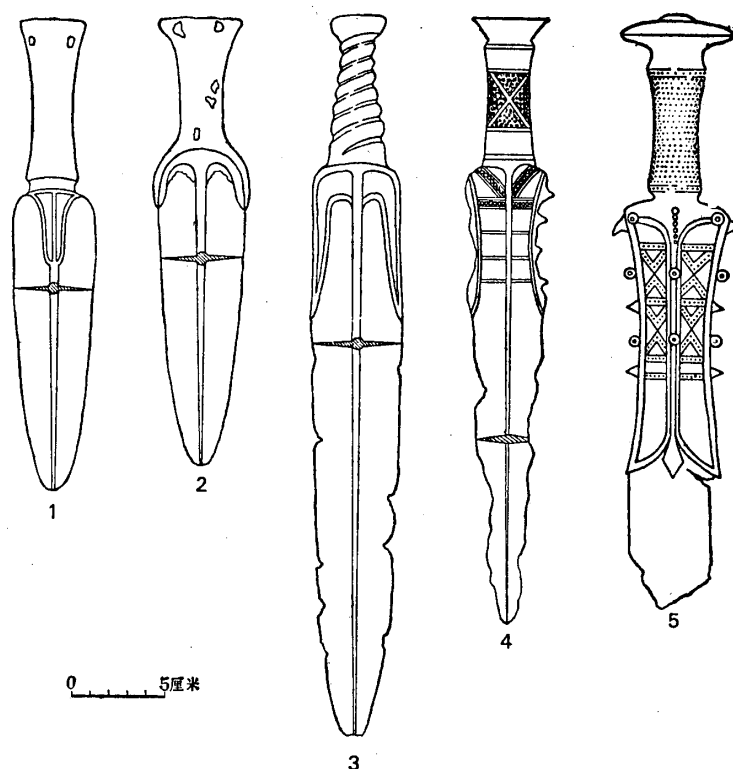


Fig. 3 童恩正氏による分類 (1: C I a式, 2, 3: C I b式, 4: C I c式, 5: 銅柄鉄剣)

加えられているもの (Fig. 13—4, 5) をC II式とし、同遺跡出土の柄に節があり、柄端が馬鞍形になるもの (Fig. 13—3) をC III式と名づけたが、その位置づけは保留した。

張増祺氏による編年²⁶⁾ (Fig. 4)

これは山字形の格を有する銅剣をさらに細かく編年したもので、柄の文様の変化を重視している。
A型……柄が扁平でらせん文がなく、山字形の格は無いか初現的形態を示す。剣身が短かく幅広で、以下の型とは違って銅色が紫紅色であるという。(1, 2)

B型……柄に細い条のらせん文が加えられ、山字形の格が出現する。剣身は長さを増し、幅が狭まる。(3～5)

C型……柄のらせん文の条が太くなり、らせん文の間に縦線や円文が加えられる。柄端に菱形文などが刻線で加えられたものが多い。(6～10)

D型……柄のらせん文が米点文に変わるが、なおその配列がらせん形を示している。(11～13)

滇西の劍

E型……柄の文様は米点文である。山字形の格が大きく変化して格子状の文様になり、柄の両側に4個の鋸歯状突起がある。(14)

童氏のC I a式をA型とし、C I b式を3分してB型、C型、D型とし、C I c式をE型としたものといってよいであろう。さらに徳欽永芝の報告²⁷⁾で戈(?)とされた銅器(Fig.13—6)を無柄の劍であると考え、本来は木柄があったものと推定している。B型のらせん文はこの木柄に巻かれていた縄を形どったものとする。彼はこの無柄劍を同遺跡出土の実心の斧とともに鍛打銅製と推定し、鍛打木柄の劍→A型→B型→C型→D型→E型→鋼柄鉄劍という一連の発展系列を示し、初期の段階から鉄器出現段階に至る滇西地区内での自律的な変化を主張した。当然のなりゆきとして、滇西式の劍は、従来言われたように北から南へ伝わったものではなく、四川省や中国北方における類似の劍は、逆に雲南から伝播したものであると論じた。

この説の最大の問題点は、雲南の劍をその成立から鉄劍との交替に至るまで、全く閉鎖的、自律的に変化したひとつの系統としてとらえたところにある。これに対する筆者の考えは、小論の主題でもあるが、とりあえず基礎的事実認識に対する疑問を示しておく。彼が「無柄銅劍」とする青銅器にはY字形の突稜があり、鍛打では非常に作りにくいものである。また、これに続くと言われたA型の劍の柄は空心であって、原始的な鑄造技術では作り難いものであるから、鍛打製銅器の直後に来るものとは考えにくい。

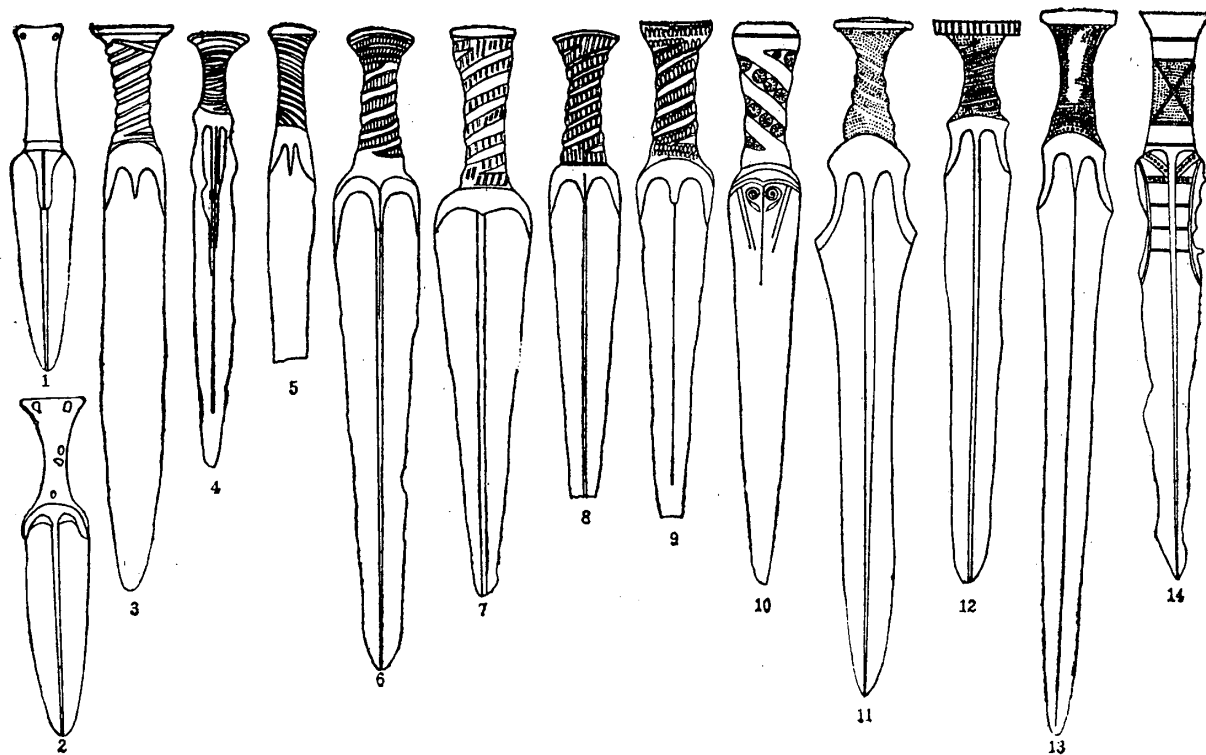


Fig. 4 張増祺氏による編年 (1.2: A型, 3~5: B型, 6~10: C型, 11~13: D型, 14: E型)

筆者の編年 (Fig. 6, Fig. 7)

筆者の編年も童氏、張氏と根本的に異なるものではないが、格の変化、柄の形の変化、柄の文様を別々に考え、各劍におけるその組合せに注意してみたい。時間的メルクマールとして格の変化を重視する。後半期において雲南と四川を別々に考える。また、銅劍と銅柄鉄劍を一括して考える。

柄の文様の変化より格の形の変化を重視する理由は、Fig. 6にも見るように、柄の文様は一時期に何種類かのものが存在した可能性が強いからである。たとえば、無節のらせん文は、後述するように、伴出土器からも古さが確認できる四川省城関例 (Fig. 13—12) から、第4期に属する四川省西昌廃品站収集品 (Fig. 7—9) まであり、時間的に限定するためのメルクマールとしては不適當である。もちろん、格の形によって一時期にまとめた群の中にみられる柄の文様の違いが、更に細かい時期区分の可能性を示している場合もある。

柄の形の変化はそれほど複雑ではなく、大体格の変化と整合的に並行して変化している。

話の順序が逆になってしまったが、この節でとりあげている「山字形の格を有する劍」は、山字形の格とともに、断面が楕円形または円形の柄を有するもので、滇西と四川省西部で出土する劍の主体をなすものである。柄は空心のものが多く、実心のものもあるが、報告書ではその区別がいちいち記載されていないものが多いので、小論ではその違いについては論じないことにする。山字形の格はあるが柄が扁平であるもの、柄の断面形は楕円形であるが格のないものおよびその他の様式の滇西、四川省西部の劍については第4節でとりあげることにする。

現在までに知られている山字形格劍の出土地は以下の通りである。

雲南省徳欽県永芝²⁸⁾、同県石底²⁹⁾、劍川県沙溪³⁰⁾、寧蒗県大興鎮³¹⁾、永勝県龍潭³²⁾、大理市鹿鶴山³³⁾、同県大墓坪³⁴⁾、同県金梭島³⁵⁾、同県五指山³⁶⁾、昌寧県新街³⁷⁾、祥雲県大波那³⁸⁾、同県検村³⁹⁾、姚安県白鶴水庫⁴⁰⁾、牟定県琅井⁴¹⁾、楚雄市万家壩⁴²⁾、禄豊県黒井⁴³⁾ (以上滇西地区)、安寧県太極山⁴⁴⁾、呈貢県石碑村⁴⁵⁾、晋寧県石寨山⁴⁶⁾、江川県李家山⁴⁷⁾ (以上滇池地区)、他に出土地不明のヤンセ報告例⁴⁸⁾がある。

四川省石棉県草科公社⁴⁹⁾、宝興県城内⁵⁰⁾、同県新江生産隊⁵¹⁾、同県明礼公社⁵²⁾、理県龍袍砦⁵³⁾、汶川県蘿蔔砦⁵⁴⁾、茂汶県城関⁵⁵⁾、甘孜県⁵⁶⁾、汶川県⁵⁷⁾他に出土地不明の西昌廃品站収集品⁵⁷⁾、四川大学蔵品⁵⁸⁾、四川省博物館蔵品⁵⁹⁾、おそらく四川省内の出土とみられる東京国立博物館蔵品⁶⁰⁾がある。

筆者の編年の概要は以下の通りである。第4期からは雲南省と四川省の違いがはっきりしてくるので、別々に記す。

〔1期〕

細い弧状の格に劍身の柱脊が交り、山字形というよりT字形に近い形を呈するもので、雲南省永芝と四川省城関に各1例がある。柄は断面形が扁平な楕円形で、永芝例は無文、城関例は無節のらせん文を有する。この形の格を有する劍は、2期以降のものと異なり、短く (永芝 24cm, 城関 28cm)、身の幅が大きい。

〔2期〕

	格の形	柄の形	柄の文様
第1期			
第2期			
第3期			
第4期			
第5期			
第6期(?)			

Fig. 6 山字形格剣の変遷

滇西の劍

格の枝が長くなり山字形を呈するものであるが、肩にまるみがあって枝が短い1期に近い形のものから、枝が長く外反り気味になった3期に近い形のものまであり、1期および3期との境界は漸移的である。滇西で約25点、四川省で7点知られているが、滇池地区での出土は知られていない。柄の形は、柄端の近くで一度すぼまったあと柄端で広がる (Fig. 6) ものが多いが、多少のバリエーションがある。柄の断面は楕円形であるが雲南省万家壩に円形のものがある。全長 25~45cm で、35cm 以上のものが多い。四川省甘孜県の例は小型 (長さ 9.7cm) で、柄が全長の半分近くを占める特異なものである。柄の文様は無節のらせん文と有節のらせん文で、後者の節には撚縄のような感じのものと、縦に刻みを入れたものがある。

〔3期〕

格の枝が強く外反し、両側からえぐられたような形になり、第4期の形に近づくが、まだ横棒は生じていない。柄端にキャップ状の無文部ができる。四川省では雲南よりも早くこの時期から柄端がまるくふくらむようである。滇西に5点、四川省に3点、滇池地区の李家山に2点あり、この時期にはじめて滇池地区の資料がみられるようになる。李家山例のうちの1点は最古の銅柄鉄刃の例である。柄の断面は楕円形または円形で、長さ 20~60cm ほどであるが、30cm 以上のものが多い。柄の文様はらせん文上に米点文が加えられたものが一般的であるが、らせん状の配置を失い、全面的に広がった米点文も存在するらしい (Fig. 4—13)。その他に無節の細いらせん文、竜文、無文などがあり、変化に富む。

〔雲南4期〕

雲南の第4期では山字形格の枝の間をつなぐ横棒が現れる。このような資料は寧蒗県大興鎮に1点と晋寧県石寨山に4点(?)ある。

大興鎮例 (Fig. 7—2) は格が全体的に長くなり、枝の間に1対の横棒が現れ、格の間に渦巻が加えられている。興味深いことは、鑄型の合せ目からはみ出したかと思われるひだが格の外側に生じていることで、この部分が格側面の突起に発達するのではないかと思われる、柄の文様は第3期に多い米点文の加えられたらせん文である。刃部欠損し長さ不明。

石寨山例 (Fig. 7—3) は格の彎曲が誇張され、短い横棒が3対入る。また第5期で盛行するボタン状の小円が生じている。柄の文様は全面的な米点文の上に斜十字文がかさなったもので、これは第5期初頭の五指山例 (Fig. 7—4) にもみられるが、あとはなくなるらしい。石寨山の報告書では1点だけ図示され、他に同型のもの3点があるとされているが、完全に同型かどうかかわからない。長さ 31~39cm。大興鎮、石寨山例ともに柄端がふくらみをもつようになっている。

なお、張氏論文に示された姚安県白鶴水庫例 (Fig. 4—10) は格の形、柄の文様ともに特殊なものであるが、刃部の根元に加えられた渦巻文と柄端のふくらみがこの時期に属するものであることを示している。

〔雲南5期〕

格は本来の形をとどめないほど長くなり、横棒が梯子のように発達し、さらに格子の四角形の中

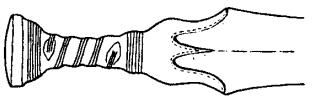

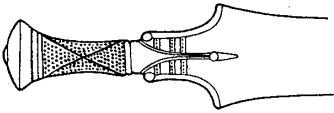
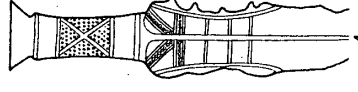
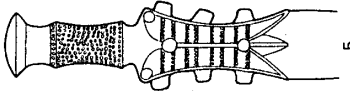
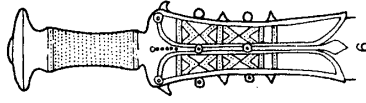
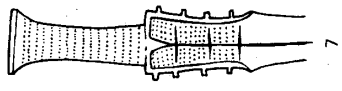
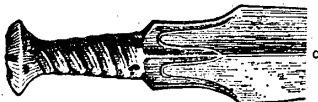
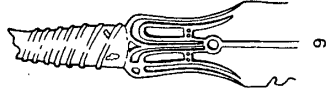
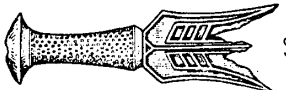
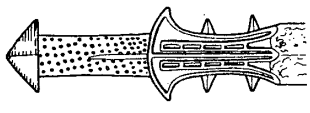
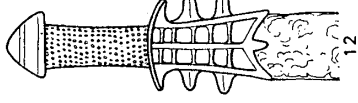
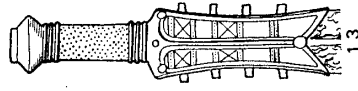

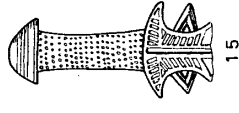
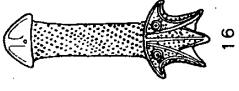
	第3期	第4期	第5期	第6期(?)
雲南	 1	 2  3	 4  5  6	 7
四川	 8	 9  10  11  12  13  14  15	 16	

Fig. 7 山字形格剣の変遷、雲南と四川の対比 (5, 6, 10~16は鉄刃を有しているか有していたとみられる)

1: 出土地不明, 2: 大興鎮, 3: 石寨山, 4: 五指山, 5: 李家山, 6: 石寨山, 7: 五指山, 8: 新江生産隊, 9: 西昌廃品站
 収集, 10: 龍袍岩, 11~13: 城関, 14: 四川大学歴史系博物館蔵, 15: 城関, 16: 東京国立博物館蔵

滇西の劍

に斜十字文が生じる。格子上にボタン状の小円が加えられ、側面の突起は三角形、四角形、円形などで、3対～5対加えられる。この時期の資料は第3期までとは逆に、大部分が滇池地区からの出土で、滇西の資料は、大理五指山 (Fig. 7—4) と洱海に浮ぶ金梭島出土の2例にすぎない。また、滇池地区のものはすべて銅柄鉄劍であるのに、滇西では全銅製と銅柄鉄刃のもの各1例である。五指山の全銅製のものは長さ35cmほどであるが、鉄刃のものは長さが著しく増し、60～70cmになり、短いものは知られていない。

この時期の柄は基部側と端に近いほうの2ヶ所が細くなる複雑な形をしたものが一般的である。断面は円に近い楕円形で、柄の文様は第4期に近い五指山例は米点文上に斜十字文であるが、以後は米点文のみになる。

〔雲南6期?〕

第5期より下ると思われる資料が五指山に1例 (Fig. 7—7) だけある。これを第6期とする。格子も退化してその面影をとどめるだけになる。格の部分にも米点文が広がるが、これは柄から広がったというよりも、格子を構成する棒の上に加えられていた点文が、格子の退化によって全面に広がったものであろう。この劍を第5期における滇西独自の変化とみないで、第5期に続くものと考えた理由はここにある。柄の形は第1期と同じような形に逆もどりしているが、断面形は第1期のものと違って円形に近い楕円形である。第5期、第6期を通じて滇西の例の柄端はみなラップ形に開いているが、これは滇西の地域色かもしれない。

〔四川4期〕

四川省の山字形格を有する劍は雲南とは異なった変化をたどったようである。実測図の精度に問題があって細部の比較は難しい場合が多いのであるが、四川省では第2期、第3期にすでに山字形格の輪郭を突線で表現するという特徴が現れており (Fig. 7—8)、この形を基本として、第4期には格の枝をつなぐ横線が加わり (Fig. 7—9)、雲南と同じ変化を示す。西昌废品站収集例 (Fig. 7—9) は全銅製で、理県龍袍砦採集例 (Fig. 7—10) は銅柄鉄劍の柄であろう。以後四川省では鉄刃の例しか知られていない。龍袍砦例は柄端がふくらみ、柄の基部と末端近くに無文部が残されている点、雲南4期の石寨山例 (Fig. 7—3) と共通する。柄の文様は全面的な米点文で、以後第6期まで変らない。

四川省には雲南の4期と5期の中間的な形のものがある。格が長大化し、両側に突起が生じる (Fig. 7—11) が、突線による山字形の構成をとどめており、格子状になっていない。格があまり大きくならず、突起は三角形の窓のあるものが1対だけの例 (Fig. 7—15) もこの時期に属するらしい。全体的に斜線文が加えられている。柄の形は円筒の先に笠がついた形になる。これらは貨幣など伴出する遺物でみると雲南の第4期に並行する可能性が強い。このような形のものは雲南では知られていないが、鉄刃を固定するために格を長大化させる工夫が四川省方面で先に行なわれたのであろうか。

〔四川5期〕

格の構成が格子状になる。四川省の従来からの形に近いもの (Fig. 7—12) と雲南の第5期とほとんど同じ形のもの (Fig. 7—13) が知られている。城関遺跡にはこの時期に属するとみられる全鉄製の例がある。四川でも雲南でもこの時期を境に、中原的な形制の剣とほとんど交替するらしい。

〔四川6期?〕

高浜氏が紹介した東京国立博物館所蔵の剣 (Fig. 7—16) は、出土地不明で、他に類例のないものである。両側の突起がなくなり、山字形、格子状の構成もみられず、全面的に米点文が加えられている。四川省の Fig. 7—15 のような形から退化したものであることはまちがいないと思われる。柄と格の区別なく全体的に米点文を加えられているところは、雲南6期とした五指山例に共通しているので、この時期まで下るかもしれないが、確かではない。この剣柄には現在銅刃がはめこまれているが、本来は鉄刃を有したものであろう⁶¹⁾。

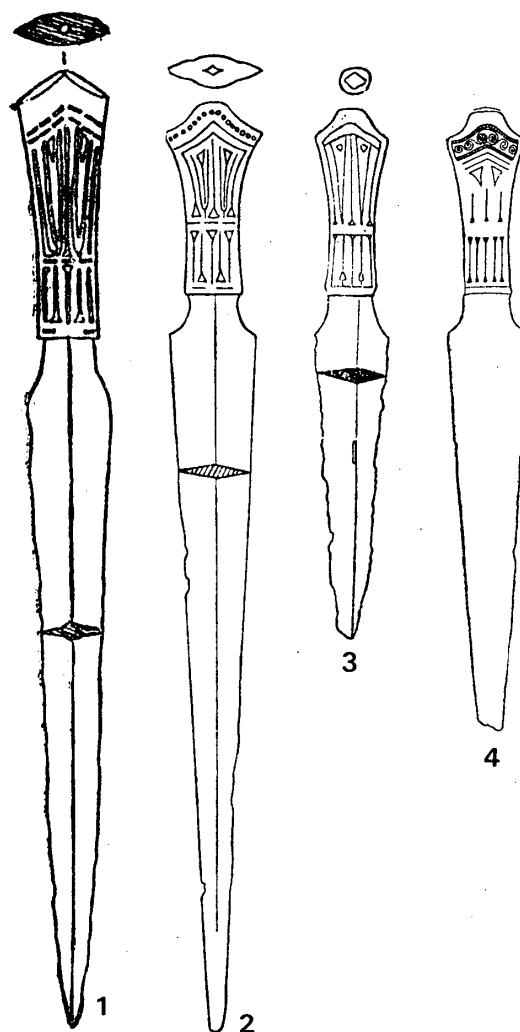


Fig. 8 李家山Ⅱ型1式剣

1 : 万家壩, 2 : 李家山, 3 : 石碑村,
4 : 石寨山 (1/4)

なお、Fig. 8に示したような或る種の剣が万家壩と李家山、石寨山、石碑村から出土し、その時間的並行関係を示す資料としてとりあげられることがあるが⁶²⁾、もしそのような対比が正しいならば、第2期の山字形格剣を出した万家壩⁶³⁾と第3、第4期の山字形格剣を出した李家山、石寨山が同時期ということになって、筆者の編年に重大な矛盾をきたすことになる。しかし、その気になってよく見ると、万家壩のもの (Fig. 8—1) は剣身基部がゆるやかなカーブのまるみをもつのに対し、李家山 (Fig. 8—2) と石寨山 (Fig. 8—4) のものは両肩がえぐりこまれたように彎曲している。この違いは、山字形格の剣における第2期と第3期の同じ部分の形の変化と同じであり、やはり年代的前後関係を示すものといえるであろう。

剣に関する編年的考察はまだ続くが、以上の山字形格剣の編年の結果から導き出される3つの結論、すなわち、雲南青銅器における西高東低の傾向、銅鼓編年の確認、雲南における鉄器普及の時間的なずれについてひとまず記しておきたい。

2 山字形格劍の編年の結果派生する諸問題

雲南青銅器発見の現状における西古東新の傾向

山字形格系統の劍の資料数を、筆者の分期に従い、滇西地区、滇池地区、四川省西部の地域別に、また材質別（全銅製、銅柄鉄刃、全鉄製）に示す（Table 2）。発掘報告ではすべての個体が図示されず、代表的なものを1点図示して、同じもの何点と記述されるのが通例なので、すべての資料の時期の比定には疑問が残り、正確な数とは言い難いが、大体の傾向を見るのに問題はないであろう。

まず滇西と滇池地区を比較してみよう（今は材質の違いにはふれない）。第1～第2期では滇西にあるのに滇池地区には資料がない。第3期で初めて滇池地区にも現れ、第4～第5期では逆に大部分の資料が滇池地区出土と一転するのである。滇池地区最古の資料（第3期）を出した李家山第1類の墓は、石寨山第I類型の墓とともに滇池地区では最古の青銅器時代の遺跡である（厳密にいうとさらに古い可能性のある青銅器がわずかに発見されているが、これについては後でとりあげる）。石寨山では第II類型墓から第4期に属する劍が出ている。先行する第I類型墓にはこの系統に属する劍の出土はないが、あったとしても第3期どまりであろう。要するに、滇池地区では、滇

Table 2 山字形格劍の資料数（時期別、地域別、材質別）

	滇西地区 (雲南西部)	滇池地区 (雲南東部)	川西高原 (四川西部)	四川盆地 (四川東部)
1 期	1 { 全銅製 1	0 {	1 { 全銅製 1	0 {
2 期	25 { 全銅製 25	0 {	7 { 全銅製 7	0 {
3 期	5 { 全銅製 5	2 { 全銅製 1 銅柄鉄刃 1	3 { 全銅製 3	0 {
4 期	2 { 全銅製 2	4 { 全銅製 4	7 { 全銅製 1 銅柄鉄刃 6	0 {
5 期	2 { 全銅製 1 銅柄鉄刃 1	73 { 銅柄鉄刃 73	3 { 銅柄鉄刃 2 全鉄製 1	0 {
6 期 (?)	1 { 全銅製 1	0 {	1 { 銅柄鉄刃 1	0 {

西でかなりの数の遺跡が知られている第1～第2期に並行する遺跡がほとんど発見されていないのである。また、第4～第5期には逆に、滇池地区の石寨山、李家山、太極山、石碑村などから豊富な資料が発見されているのに、滇西地区にはわずかな資料しか知られていないことが、雲南青銅器の西古東新の傾向を著しいものになっている。そして、第4節で述べるように、山字形格剣に先行する剣の追求は、この西古東新の傾向をさらに著しいものにするようになるのである。

四川省では第1期から第6期までの山字形格剣がひと通り出土している。これらの出土地はすべて四川省西半の山岳、丘陵地帯（川西高原）の遺跡であり、中原の青銅器文化と比較的強い関係を有する巴蜀式青銅器が分布する東半の平野部（四川盆地）では1点の出土も知られておらず、山地部と平野部の文化の対照は著しい。

銅鼓編年の確認とヘーガーⅠ式銅鼓の成立について

小論のはじめに、先Ⅰ式銅鼓とヘーガーⅠ式銅鼓が、その分布からみると、時間的に並行する異なる分布圏をもつ銅鼓と判断されかねないことを述べた。しかし、山字形格の剣の編年に照してみれば、大波那、万家壩における先Ⅰ式銅鼓は第2期に対比され、Ⅰ式銅鼓は李家山、石寨山における伴出から第3期以後のものということになり、結局、従来からの、先Ⅰ式がⅠ式に先行するという編年に誤りはないといえるのである。

先Ⅰ式銅鼓が滇西で多く出土し、Ⅰ式銅鼓が滇池地区で多く出土しているのは、山字形格剣の第1～第2期が滇西で多く出土し、第4～第5期が滇池地区で多く出土しているのと大体同じ現象であって、遺跡の発見自体に強いかたよりがあることに原因しているのである。

先Ⅰ式銅鼓とⅠ式銅鼓は時間的前後関係にあることが確認された。しかしその差は山字形格剣の編年に照してわずかに1段階にすぎない。厳密にいうと、大波那や万家壩の剣は第2期のうちでも新しい、第3期に近い様相を示すものであるから、1段階以下といったほうがよい。ところが先Ⅰ式とⅠ式銅鼓の間における文様の表現技術の飛躍は非常に大きい。この事実は、Ⅰ式銅鼓の成立に際して新たな技術の導入があったことを暗示している。延いては、先Ⅰ式とⅠ式が基本的には時間的前後関係にありながらも、Ⅰ式の成立時点においては、両者が同時に作られた可能性を示すものである。

その新技術の母胎は、広く中国中原の系統の戦国時代青銅器に求められる。これについて詳しく述べる用意はないが、とくに注目される資料の1例として、故宮博物院所蔵の銅壺⁶⁴⁾をあげておく。この銅壺は人物などの写実的な表現、その陰刻状表現、また枝岐れした渦巻文においてヘーガー第Ⅰ型式最古の銅鼓の文様にきわめて近い（Fig. 6）。故宮の銅壺は出土地不明であるが、これとそっくりの銅壺が四川省成都近郊の百花潭で出土しており⁶⁵⁾、ヘーガーⅠ式成立に関与した新技術の一部は四川省方面から南下した可能性を示している。この場合の四川省とは、山字形格剣の分布する西部の山岳丘陵地帯ではなく、中原とのつながりの強い巴蜀式青銅器の分布した中、東部の平野である。成都に近い簡陽県糖廠で戦国後期の青銅器に伴出した雲南系の銅戈⁶⁶⁾は、この時期に同地

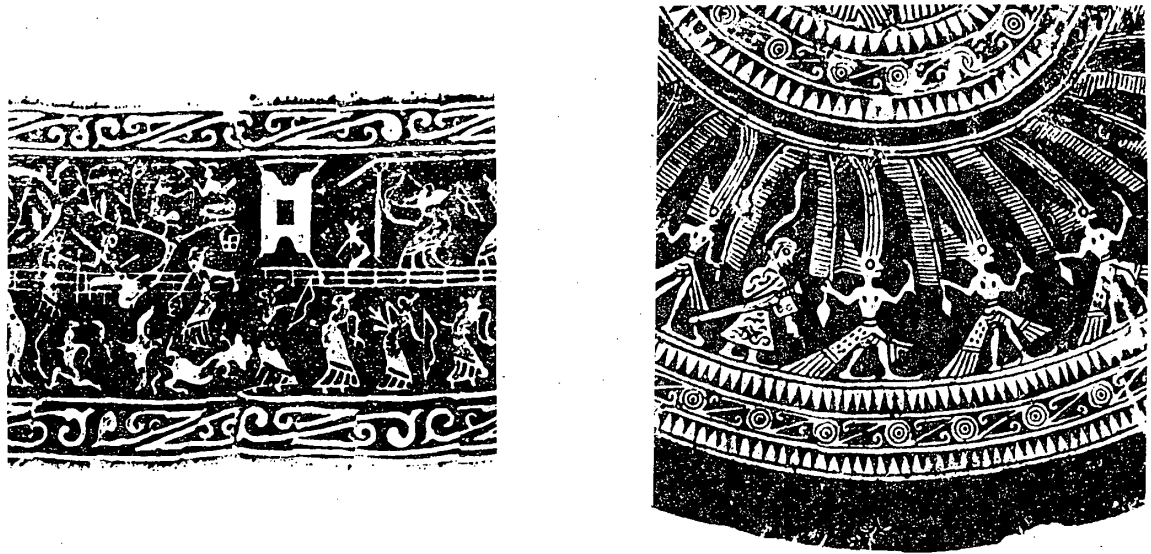


Fig. 9 故宮博物院蔵の銅壺（左）と石寨山12号墓出土双蓋貯貝器（右）の図象表現

域と雲南の間に交渉があったことを示す物的証拠である。

百花潭の銅壺は陰刻部分に象嵌が施されている。ヘーガーⅠ式初期の銅鼓の大きな特徴である文様の陰刻的表現は、このような、しばしば象嵌を施されている戦国時代青銅器の陰刻的表現手法の系統を引くものと考えられ、具体的な技術としては、原型（模）への文様の刻みこみと、その鑄型（范）への反転技術に負うところが大きいといえる。ラオス鼓⁶⁷⁾、ネルソン鼓⁶⁸⁾などヘーガーⅠ式初頭の銅鼓および、石寨山12号墓双蓋貯貝器⁶⁹⁾ (Fig. 9 右)、攪乱墓出土の騎馬人物を描いた銅器残欠⁷⁰⁾などの類似の文様表現を示す銅器にみる文様の表現技術は、先Ⅰ式銅鼓のそれとくらべて飛躍的な進歩があるが、興味深いことに、その技術はこの段階（Ⅰ式銅鼓1期）を頂点として衰退に向い、まず胴部の文様が凸線によって表現されることが多くなり（Ⅰ式2期）、次いで打面の文様も凸線による表現に変わる（Ⅰ式3期）。これはいうまでもなく、鑄型（范）へ直接文様が刻みこまれるようになったことを示している。ヘーガーⅠ式末期には、スタンプを作って鑄型の粘土が軟らかいうちに文様を押捺することがさかんに行なわれるようになる（Ⅰ式4期⁷¹⁾）。銅鼓製作技術の突然の飛躍と以後のゆるやかな衰退の過程は、新技術の導入とそれが維持されなかった状況を示すように思われる。

雲南における鉄器の普及 (Table 2)

雲南における初期の鉄器は銅柄鉄刃のものが多い。形制において従来のを踏襲しながら、刃部のみ鉄におきかえるのである。雲南における最古の鉄剣は李家山21号墓出土の、山字形格剣の第3期に属する銅柄鉄刃のものである。第3期の全銅製のものは滇西で例が多いが、鉄刃を有するのはこれだけで、滇池地区における鉄器の出現が、滇西に先行することを示しているといつてよいで

あろう。もっとも滇西の祥雲県検村石棺墓⁷²⁾では、この時期に属する可能性のある鉄環が2点出土している。李家山21号墓の年代は、後述するように前漢早期、さかのぼっても戦国時代後期と思われる、実年代でいうならば紀元前2～3世紀にあたる。

第4期に属する銅柄鉄剣は、四川省で5～6点知られているだけで、この時期はまだ雲南では鉄刃の剣は普及していない。先述のように、鉄刃の採用とそれを固定するために格を大きくする工夫が四川省で行なわれた後、雲南に伝播したのであろう。

次に第5期、第6期であるが、四川省と滇池地区のものがすべて鉄刃であるのに、滇西の五指山には全銅製のものが2点ある。これは滇西では鉄器の普及がおくれたことを示すものであろう。

以上から、鉄器は、四川省西部→雲南省東部→雲南省西部の順で普及したことになる。もっともこれは鉄器の伝播の経路を示すものではなく、雲南の鉄器は、I式銅鼓の鑄造技術の場合と同様に、四川省東部方面からの影響によるところが大きいと思われる。

なお、雲南では鉄器はまず武器類として現れ、農工具に用いられるようになるのは少しおくれるようである。

3 土器編年からの検討

先にとりあげた山字形の格を有する一連の系列には属さない剣が、滇西の徳欽県納古⁷³⁾、同県永芝⁷⁴⁾、永勝県龍潭⁷⁵⁾、四川省西部の巴塘県扎金頂⁷⁶⁾、宝興県五龍公社⁷⁷⁾、茂汶県城関⁷⁸⁾、同県營盤山⁷⁹⁾から出土している。これらは様々の形態のものがあるうえに、全体としての資料数が乏しく、型式学的な整理を行なって変遷を跡づけることが難しい。幸い、これらの遺跡は土器をともなうものが多いので、土器の編年的整理によってある程度年代的前後関係をとらえることができる。

まず雲南省北西端の徳欽県をみると、そこには納古、永芝、石底⁸⁰⁾という3つの重要な遺跡がある。これらの遺跡はもっとも遠いものどうしても100kmほどしか離れていないから、遺跡ごとの土器の違いは地域差よりも年代差を示す可能性が強い。

納古出土の土器 (Fig. 10—1～7) は大部分が小型の双耳壺で、文様としては頸部に2本の沈線と点列からなる単純な文様、胴部や耳(把手)に菱形を刻んだものがある。ボタン状の貼付文はみられない。

永芝出土の土器 (Fig. 10—8～15) は小型の無耳壺、単耳壺、三耳壺、注口付単耳壺で、器形の変化が納古のものより大きい、文様としては納古と同様に頸部に沈線と点列による文様を刻んだもののほか、胴部に鋸歯文を刻んだもの、沈線で渦巻文を描いたものがあり、胴部や把手上にボタン状の貼付文が加えられたものもある。

石底出土の土器 (Fig. 10—16～20) は、無耳、単耳、双耳の小型壺で、文様としては、頸部の沈線文のほか、胴部に大きな鋸歯文、沈線による渦巻文が加えられているものがあり、多くの土器の胴部と把手上にボタン状の貼付文が加えられている。納古と永芝には一部共通するものがあり、永芝と石底の間にも共通するものがみられるが、胴部の文様とボタン状貼付文の発達をメルクマール

滇西の剣

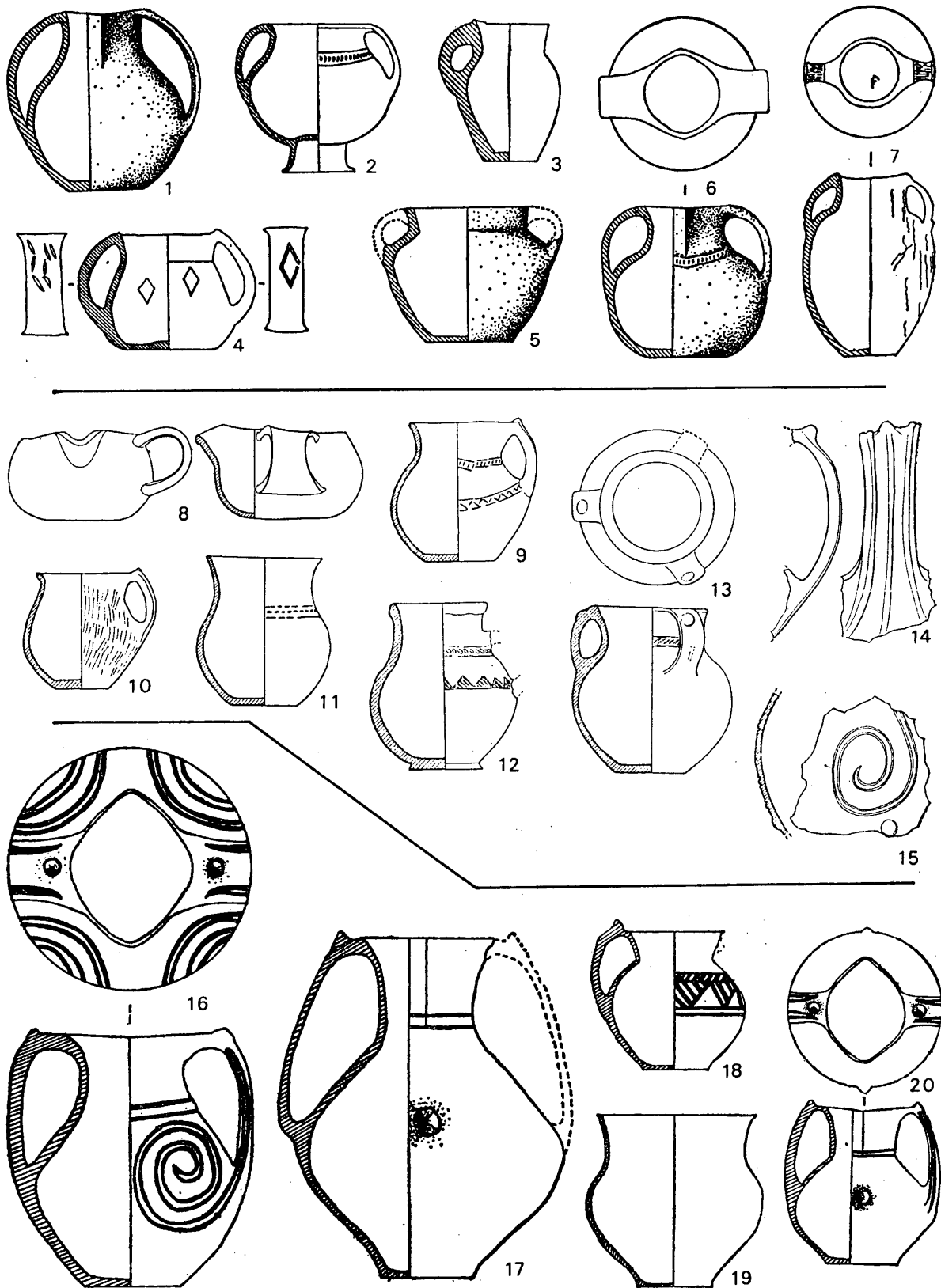


Fig. 10 雲南省德欽県納古(上), 同県永芝(中), 同県石底(下) 出土土器

(7 : 1/10, 14, 15 : 2/5, その他 : 1/5)

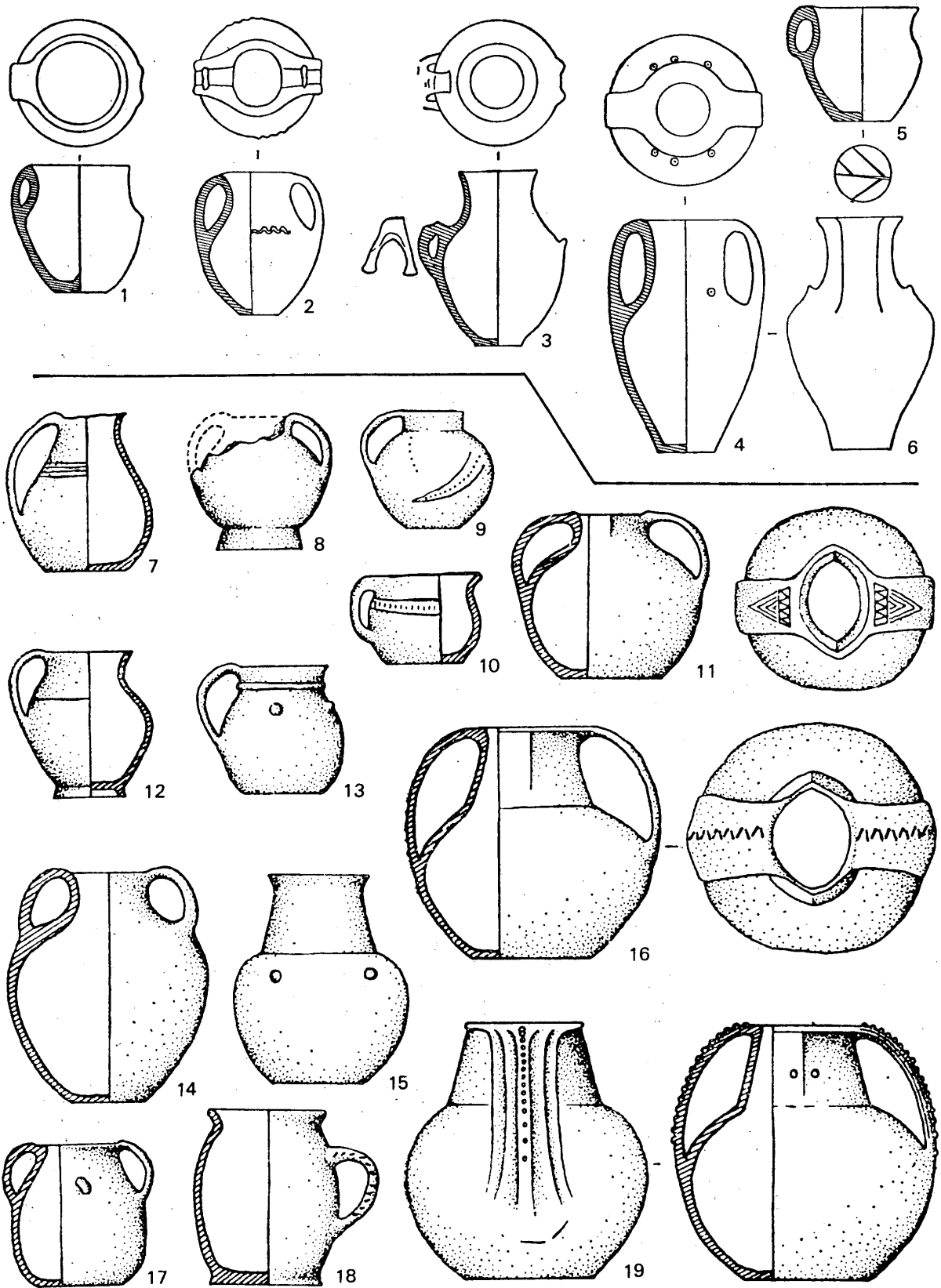


Fig. 11 雲南省寧蒗縣大興鎮（上）と四川省巴塘縣札金頂（下）出土の土器

(3, 6 : 1/10, その他 : 1/5)

滇西の剣

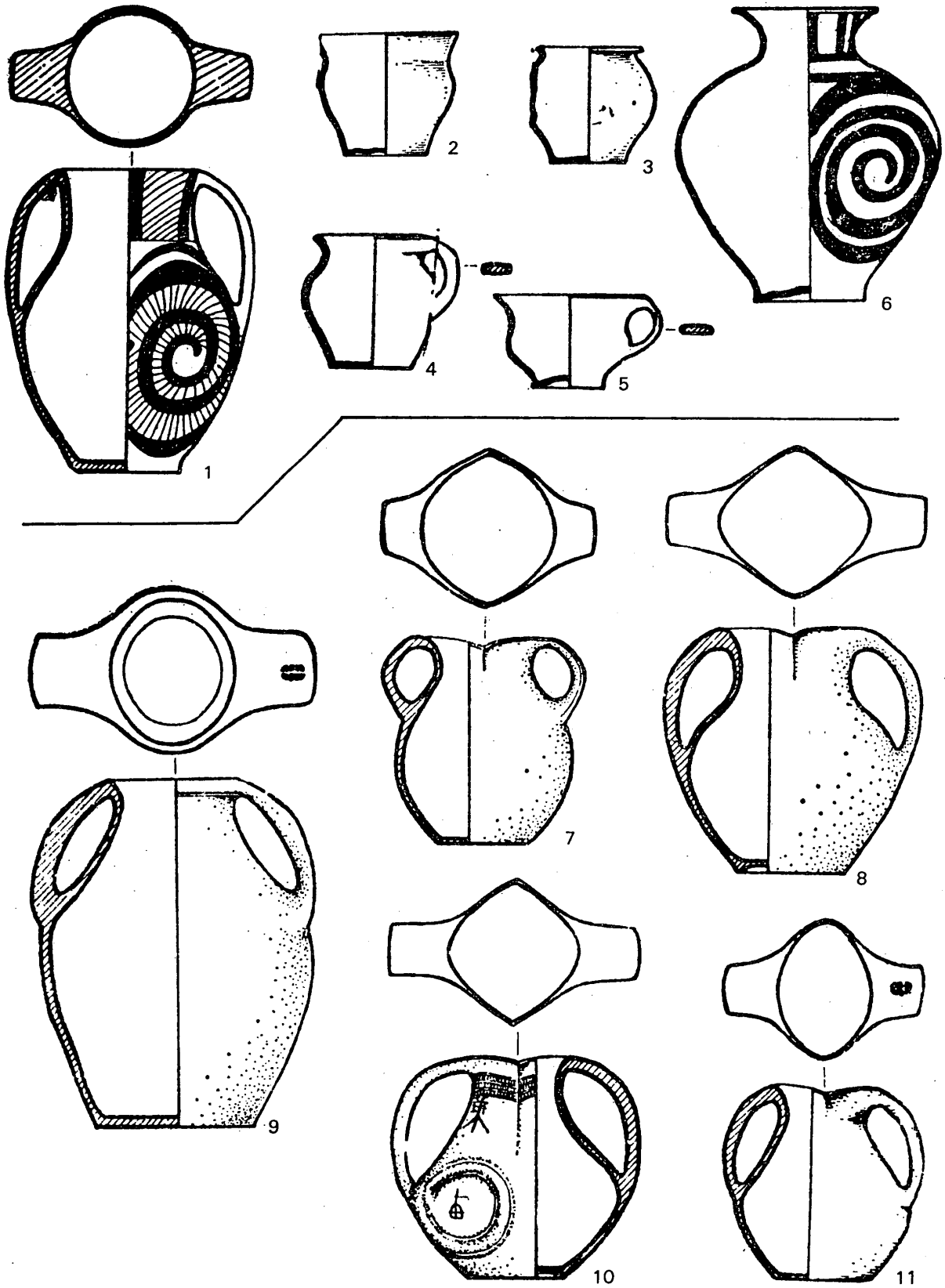


Fig. 12 四川省茂汶县城関出土土器，上：早期，下：中期（1/5）

にして、納古→永芝→石底の変遷をとらえることができる。

寧蒭県大興鎮⁸¹⁾には第2期と第4期に属する山字形格の剣がある。後者を出土した4号墓出土と同型式の土器をここではとりあげる (Fig. 11—1～6)。この遺跡は同じ滇西地区内とはいっても徳欽県とは離れているので、地域差の可能性を考慮しなければならないが、肩部のS字状貼付文、蛇行貼付文、把手の上の棒状貼付文等は石底の土器のボタン状貼付文から発達したものとみてよいであろう。ほぼ同じ土器が四川省南部の米易県彎丘の大石墓⁸²⁾からもまとまって出土している。

このような土器による納古→永芝→石底→大興鎮という順序は、山字形格剣による、永芝(1期, 2期)→石底(2期)→大興鎮(4期)という順序とよく一致する。従って、土器のうえで永芝に先行するとみられる納古の剣は永芝に先行する位置が与えられる。このことは、山字形格1期以前の剣が、張氏のいうように鍛打製の無柄銅剣に収束してしまふのではなく、意外に複雑な様相をもつことを示す点で重要である。

納古の土器とは相違もあるが、かなり近似したものが四川省西部の巴塘県扎金頂からも出土している (Fig. 11—7～19)。無耳、単耳、双耳の壺で、ボタン状貼付文は胴部にみられるものがあるが、把手上にはない。全体として納古に近いが、多少永芝に近い要素が認められるとよいであろう。この扎金頂では無柄銅剣とみられるものが1点出土している。

目を転じて四川省北西部を見ると、そこには茂汶県城関という重要な遺跡がある。46基の石棺墓が発掘され、伴出遺物と墓の分布によって早、中、晩の3期に分けられている (Fig. 12)。早期には山字形格剣の第1期があり、中期には第4期と第5期がある。付近では第2期に属する剣が採集されているが、発掘された墓ではこの時期のものが欠落しているようにみえる。

早期の土器でもっとも特徴的なのは、器面を研磨して光沢をもたせたあと、硬い工具でこすりこって渦巻文を表現した無耳壺や双耳壺で、茂汶県營盤山にも同じものがあり、そこでは変った形の剣を2点ともなっている。中期の墓にも渦巻文を有する双耳壺があるが、これは浮彫状に表現されている。類例はこの地域の石棺墓でしばしば出土している⁸³⁾。永芝や石底の渦巻文を有する双耳壺もこれと密接な関連を有するものであるが、文様は刻線で刻まれている。石底例は山字形格第2期の剣にともなったものであるから、時間的には城関の早期と中期の中間に相当するものということになる。

4 最古の銅剣

土器による編年の結果、山字形格剣の第1期に並行または先行する剣として、雲南省滇西地区の納古、永芝、四川省西部の扎金頂、城関、營盤山の資料が登場することになった。また、土器はともなっていないがこれら諸遺跡の剣と同類の剣が滇西の龍潭、四川省の五龍公社で出土している。これらと関係があるとみられるが年代的位置づけのはっきりしない小型の剣が四川省河西の大石墓⁸⁴⁾から、明らかに年代の下る銅柄鉄刃のものが滇西の大興鎮⁸⁵⁾で出土している。以下これらの資料をひと通り紹介する。

滇西の劍

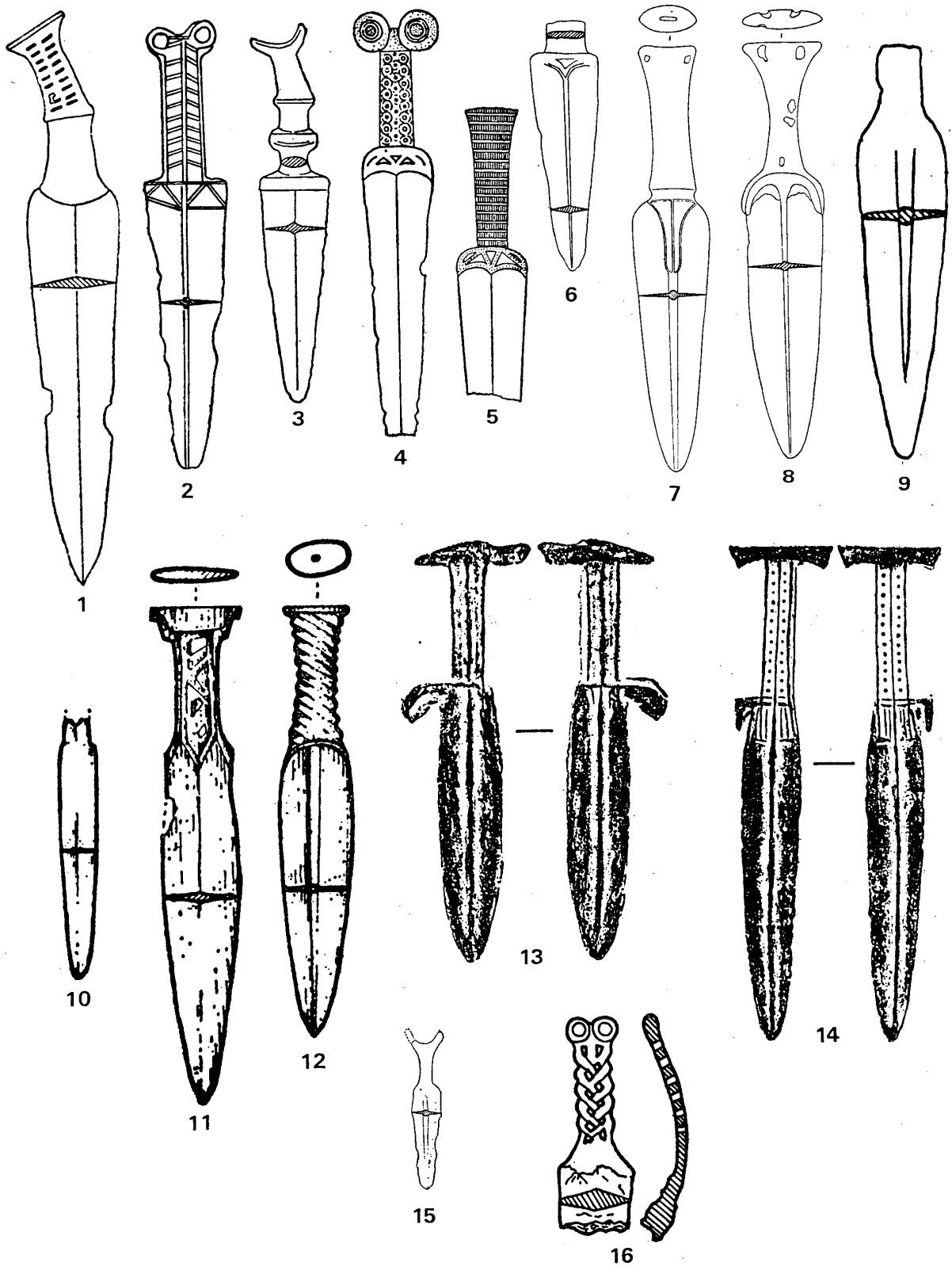


Fig. 13 山字形格劍の第1期に並行または先行する劍（15. 16を除く）（1/4）

〔雲南省徳欽県納古石棺墓群〕 (Fig. 13—1, 2)

2点の剣がある。Fig. 13—1は22号墓出土のもので、格はなく、柄は曲り、2段に分れ、身に近い部分は扁平、柄端に近い部分は中空でスリット状の文様があり、断面はなつめ形である。長さ34.4cm

2は採集品で、三角形の文様のある格があり（報告では格でなく単なる文様とする）、柄は扁平で、羽状文で飾られている。柄端に2つの円形の突起がある。長さ26.7cm

〔雲南省永勝県龍潭〕 (Fig. 13—3～5)

龍潭ダムの修築のおりに一群の青銅器が発見され、その中に納古の曲柄剣に似たもの3点、2つの円形突起のある剣25点がある⁸⁶⁾。出土品のうち3点が董氏論文⁸⁷⁾中で紹介されている。

3は曲柄剣で、幅のせまい格があり、柄は納古例と同様、2段に分れて曲っているが、身に近い部分にはさらにたががまわっているため3段のようになっている。柄端はY字形に伸びている。長さ約23cm

4は山字形を極端に扁平にしたような格があり、格上には三角形の文様がある。柄は扁平で、同心円文が密に加えられている。柄端には2つの円形の突起がある。残長約25cm。

5は2と同様な格を有するが、柄は円筒形で、平行線からなる文様がある。

なお、張氏論文には永勝龍潭出土として山字形格第2期の剣が紹介されている (Fig. 4—8)。また別の論文⁸⁸⁾によると遺物出土数は剣78点、矛31点、鋤1点、鏝3点、紡錘車2点、銅柄鉄矛1点であるという。

〔雲南省徳欽県永芝古墓群〕 (Fig. 13—6～8)

先述した永芝では山字形格1期以外にも古い剣が出土している。いずれも採集品であるため伴出関係は不明である。永芝の土器は全体的に納古より新しい様相のものが多いが、オーバーラップしている部分もあるので、これらの剣の中には納古と並行する古さのものがあるかもしれない。

6、無柄の剣、報告では戈?とされているが、張氏と同様、無柄の剣とみたい。柱脊が基部でY字形になる。茎は扁平で短い。他の材質の柄があったものと思われる。長さ14cm。

7、無格の剣、柄は扁平で中空(?)、身の基部に三叉形の文様がある。格はないが身と柄の間に溝があり、何かはまっていたかのようなようである。長さ25cm。

8、すでに紹介した山字形格剣の1期の資料、長さ24cm。

〔四川省巴塘県扎金頂石棺墓群〕 (Fig. 13—9)

土器からみて納古に近い時期のものと思われる。9号墓から1点の剣が出土している。短い茎のつく単純な作りで、永芝の6と同様、無柄の剣であろう。長さ23.8cm。

〔四川省宝興県五龍公社石棺墓群〕 (Fig. 14, 15)

重要な遺跡であるが、報告書に実測図が載せられていないうえに写真が不鮮明で、隔靴搔痒の感がある。曲柄剣4点を含む7点の剣が出土している。

Fig. 14—1は扁平で中空の柄を有する。柄に2個の小方孔がある。柄の両面に卷文があり、身の

滇 西 の 剣

柄に近い部分に三角形の文様がある。長さ22cm。柄が短かすぎるので木柄が続くのであろう。永芝，扎金頂の無柄剣に通じるところがある。3号墓出土，長さ22cm

Fig. 14—2は第1期の形の山字形の格を有するが，柄は扁平で，その両側は厚く，中間が薄くなっている（以下これを双柱形の柄と呼ぶ）。残長19cm，5号墓出土。

Fig. 14—3は無格の剣で，柄の断面は楕円形である。永芝の無格の剣に似ている。4号墓出土。残長20.5cm

Fig. 14—4は納古の曲柄剣に龍潭の曲柄剣のたがを加えたようなもので，たがの上に三角文がある。身の柄に近い部分にも2列のジグザグの三角文があるという。写真不鮮明であるが，納古の2の格のようなものであろう。2号墓出土，長さ31cm

Fig. 15—1～3はほぼ同じ形態である。2段に分れた曲柄を有するが，身の形は特異である。身の柄に近いところに4個の小突起がある。順に3，4，2号墓出土。長さ23～23.5cm

以上の資料は，Fig. 14—2が他の剣と伴出していないが，その他はFig. 15—1～3という同じ形の剣と伴出しており，ほぼ同時期のものと認められる。

〔四川省茂汶县城関石棺墓群〕（Fig. 13—10～12）

土器編年に関してすでにとりあげた城関の早期の墓から3点の資料が出ている。

10，柳葉形で格はなく，柄は扁平で1孔がある。永芝，扎金頂などの無柄剣に通じるところもあるが巴蜀式の剣にも似る。長さ18cm，D12号墓出土。

11，柄は双柱形をなし，その間を斜めの折線でつなぐ透し文様がある。身に接する部分では凸線がW字形になっている。山字形格にも近い形である。長さ32.8cm，D2号墓出土。

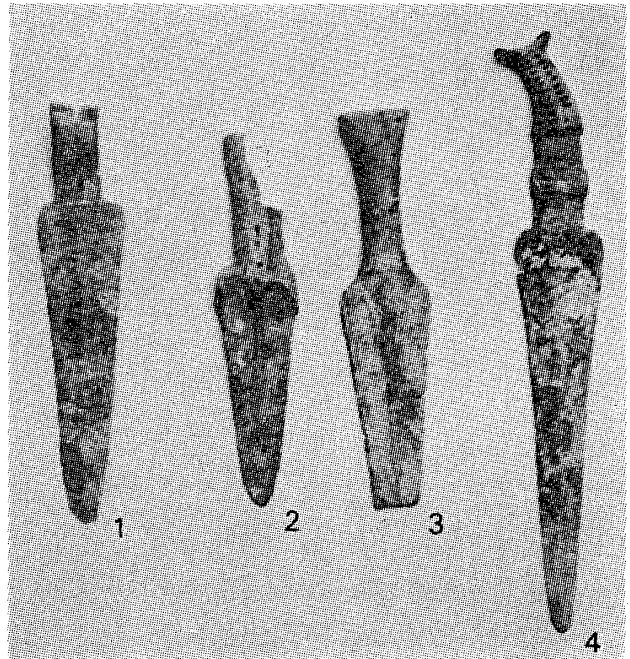


Fig. 14 四川省宝興県五龍公社出土の剣（1）

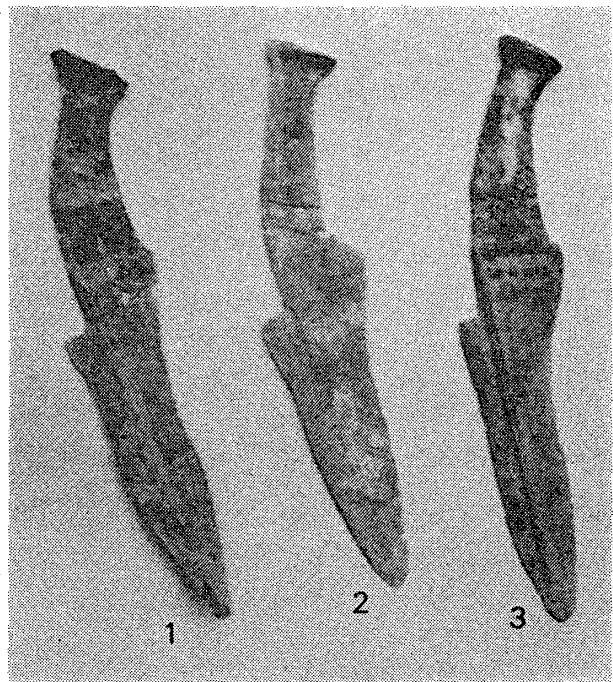


Fig. 15 四川省宝興県五龍公社出土の剣（2）

12, すでに紹介した (Fig. 6) 山字形格剣第1期の資料, 格は山字形というよりも細いC字形をなす。柄にらせん文がある。長さ 28cm, D7号墓出土。

〔四川省茂汶県營盤山石棺墓群〕 (Fig. 13—13, 14)

城関遺跡の早期とほぼ同じ土器を有する營盤山の3号墓に2点の剣がある。

13はほとんど無文で柄は扁平, 格の片側に鉤形の突起がある。柄端はT字形になる。長さ24.8cm。

14もほぼ同じ形の剣であるが, 格と柄に文様がある。格は納古の1に多少似たところがある。長さ 29.2cm

〔四川省西昌県河西大石墓群〕 (Fig. 13—15)

時期ははっきりしないが, 龍潭の Fig. 13—3, 五龍公社の Fig. 14—4 に似るY字形の柄端を有する剣が1号墓から出ている。無文, 無格で長さ 9cm の小型品である。

〔雲南省寧蒗県大興鎮〕 (Fig. 13—16)

山字形格剣の出土でとりあげた遺跡であるが, 納古, 龍潭の双円突起の剣と系統的につながりを有するとみられる銅柄鉄剣も出土している。編み紐のような柄も他に類例のない⁸⁹⁾ものである。鉄刃を有するところから山字形格剣の3期以降のものとみられる。

この時期の剣に共通する特徴として短剣に限られるということがあげられるが, 形態は非常に変化に富んでおり, 比較的単調な変化を示す第2期以降とは対照的である。柄の形でみるならば, 無柄のもの, 曲柄のもの, 扁平な柄のもの, 断面が円形, 楕円形の柄のものがあり, それぞれがさらに分類できる。格の形で分けるならば, 無格のもの, 長方形のもの, 山字形の格, 無文の格と有文の格がある。柄端は何もないもの, T字形のもの, Y字形のもの, 双円形のものがある。

これらの変化に富む剣は, 伴出土器からみても, 遺跡ごとの種類の組合せからみても, 比較的短期間に存在したことが確かであって, 変化の大きさを年代的变化によって説明することは困難である。様々な要素の複雑な組合せからなっているのがこの時期の剣の実態であろう。

大興鎮の銅柄鉄剣は双円形の突起が残存することを示すものとみられるが, 孤立した例なので結論的なことはいえない。

この種々の要素のなかに特別興味を引くものがある。扁平な柄, 双柱形の柄, らせん文の柄, 山字形を呈さない格, 有文の格, 双円形の突起, T字形の突起である。これらはすべて中国北方に分布するいわゆるオールドス・ブロンズの剣の比較的新しい部分にみる特徴なのである。次節で述べるように, 中国北方の短剣もこれら種々の要素の組合せからなっているし, そもそも長剣を欠き, 短剣のみからなること自体, 基本的な共通性と認められるのである。

5 滇西の剣の実年代および中国北方の剣との関係

山字形格剣の第4期と第5期には実年代を知る手がかりになる遺物がともなうことがある。特に貨幣は重要である。

滇西の劍

雲南5期の劍は、石寨山13号墓で前漢文帝期の四銖半兩3枚を、5号墓で前漢の五銖錢163枚を、李家山26号墓で前漢の五銖錢42枚をともなっている。大体前漢中頃の劍とみてよいであろう。

雲南4期の劍は、石寨山では5期の劍とともに出ることも多いが、前者が第Ⅱ類型墓のみから出土し、後者が第Ⅱ類型墓と第Ⅲ類型墓から出土していることは、年代差を示すものであろう。両者の伴出は伝世によるものとみたいが、あるいは製作自体にオーバーラップする時期があるのかもしれない。13号墓で文帝の四銖半兩と、10号墓では前漢中期に流行した四葉文鏡と伴出している。大体前漢前半の年代が与えられよう。

四川省5期の劍は、城関で四銖半兩をともなった墓がいくつかあり、雲南5期と同様に前漢中頃のものとみられる。

四川省4期の劍では、やはり城関に秦半兩のともなった墓、秦半兩と八銖半兩をともなった墓がある。前漢の初頭頃とみてよいであろう。

第3期になると実年代比定の材料が乏しくなる。李家山の第3期の劍は、戦国末から前漢早期とされている同遺跡の第1類墓から出土しているが、第1類墓の年代は第2類墓の年代にかさあげしたものであって、それ自体が実年代推定の根拠をもつわけではなかった。しかし最近、四川省簡陽県糖廠で、李家山第1類墓出土の戈と酷似する人形文を有する戈が戦国後期の青銅器とともに出土し⁹⁰⁾、上記の年代づけが妥当であることが認められた。ただこの戈の援(刃の部分)の形が李家山にみられるのと少し違う形である点に多少問題が残されている。

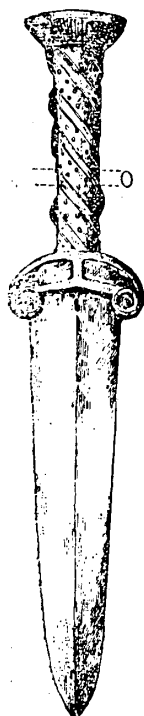
第2期については実年代推定の手がかりが見当らない。

さらに古い第1期およびその直前の劍は先述のように、中国北方の劍と類似性を有するものが多くなるので、その類似性を手がかりにして実年代を与えることがいつか可能になると思われるが、現在のところ四川・雲南の劍と中国北方の劍の間には一般的類似性はあっても、時間的同時性を主張できるほどの一致は見出せないし、かんじんの北方の劍自体、研究が十分に進んでいるわけではない。

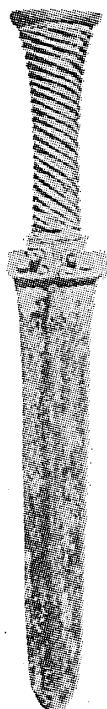
最近の中国北方の劍に関する論文に、烏恩氏⁹¹⁾によるもの、高浜秀氏⁹²⁾によるもの、鄭紹宗氏⁹³⁾によるものがある。

高浜氏がE V類として分類した劍は、らせん文を有する柄や格の形が雲南の山字形格劍1期頃のものにかなり似ており、高浜氏もその関連を説いている⁹⁴⁾。有文の格を有し、双円突起を有するものもある。高浜氏がE VI類とするものは、E V類の柄が扁平なものにおきかえられたものである。柄は双柱形で、柄端は双渦文になっている。E V類とE VI類を合せると、らせん文の柄、扁平な柄、双柱形の柄、有文の格、双円突起という雲南の古段階の短劍の特徴が多く揃うことになり注目されるが、E V類、E VI類の劍は、年代はおろか出土地もはっきりせず、漠然とオルドス地方を含む中国北方地域と考えられているにすぎない。

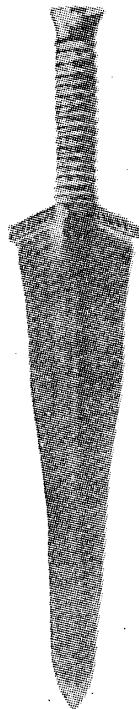
共通する要素のうちでもとくに双円突起は、四川、雲南と中国北方の関係をとらえる手がかりになるかもしれない。オルドスの短劍の中に、柄端に2つの鳥頭がつき、その長いくちばしがまわり



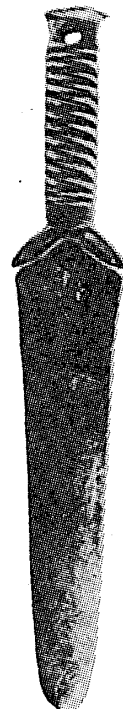
51 EV類
(Loehr 1949)



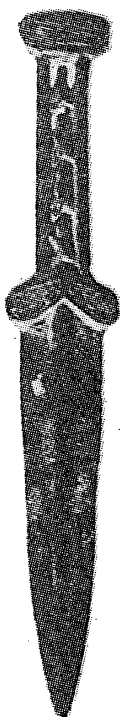
50 EV類
Courtesy of the Freer Gallery
of Art, Smithsonian Institution,
Washington, D.C.
24.8cm



49 EⅢ類
ストックホルム
東アジア美術館蔵
(Andersson 1932)



48 EⅢ類
河北承德出土
(『河北省出土文物選集』)



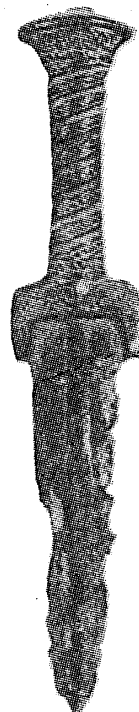
56 EVⅥ類
(Andersson 1929)



55 EVⅥ類
(Loehr 1949)



54 EV類
京都大学蔵



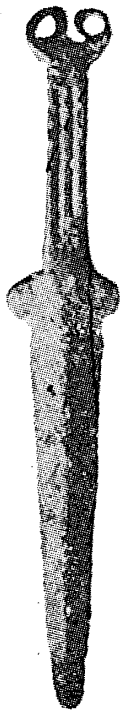
53 EV類
天理参考館蔵
現長 24.1cm



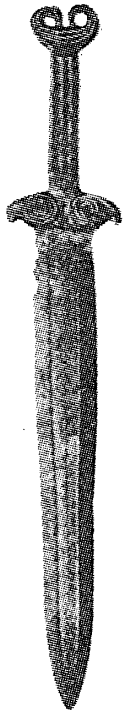
52 EV類
(Loehr 1949)

Fig. 16 高浜秀 (1983) 氏によるオルドス青銅短剣の型式分類

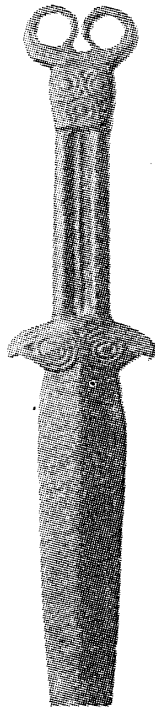
滇西の劍



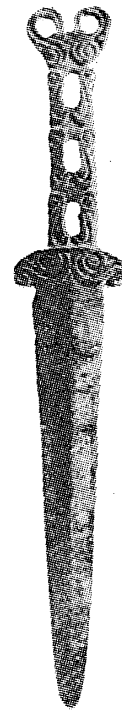
61 FI類 和林格爾
范家窯子出土
〔『内蒙古出土文物選集』〕



60 FI類
ストックホルム
東アジア美術館蔵
(Andersson 1932)



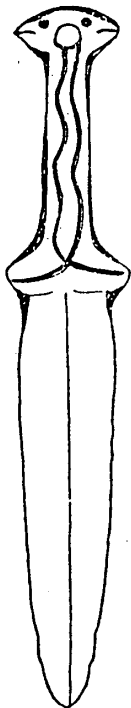
59 FI類
京都大学蔵



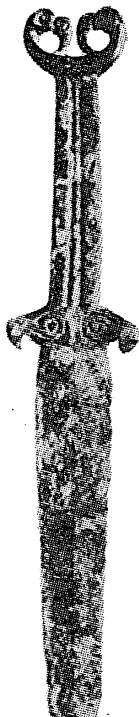
58 FI類
ストックホルム
東アジア美術館蔵
(Andersson 1932)



57 FI類
懷來北辛堡出土
〔『河北省出土文物選集』〕



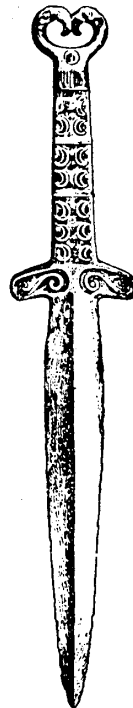
66 F類類似
准格爾旗
西溝畔出土
〔『文物』1980-7〕



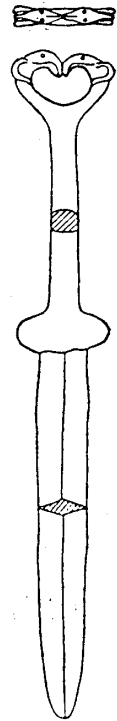
65 FII類
(Salmony 1933)



64 FII類
(Salmony 1933)



63 FII類
(Loehr 1949)



62 FII類
杭錦旗公蘇垞出土
〔『考古學報』1976-1〕

Fig. 17 高浜秀 (1983) 氏によるオールドス青銅短劍の型式分類

こんで双円突起を形成したものがある。鳥の表現がわかるものと便化して単なる文様にすぎなくなったものがあり、前者が後者より古いと考えられている。両者を合せて高浜氏はF I類、鳥恩氏はII c型としており、鄭紹宗氏は同氏編年の第6期に入れている。この種の短剣は、河北省懷来県北辛堡⁹⁵⁾で戦国早期頃の青銅器類と伴出している。中国北方のE V類、E VI類や雲南古段階にみられる双円突起が、このF I類の鳥頭形突起が便化して生じたものであることが証明されれば、雲南古段階の剣に戦国早期という上限年代が与えられるだけでなく、黒海周辺にまでF I類に酷似した剣が分布することから、西方のスキタイ系文化との関係がとらえられることになるが、残念ながら現在のところそのように断定することはできない。それは中国北方といってもずっと東になるが、遼寧省南山根⁹⁶⁾（春秋早期）出土の一群の剣の流れをくむ剣（鄭氏編年の第4期）の中に双円突起をもつものがあるが、これはF I類の写実的な鳥頭による双円突起より先行する可能性があって、双円突起の起源をすべて鳥頭からの便化で説明することを困難にしているからである。いずれにしても雲南古段階の剣が類似するのは南山根に代表される一群の剣よりも後のものであるから、春秋早期までさかのぼる可能性はほとんどないといってよい。また雲南古段階の剣は、前漢初期に属する第4期の山字形格剣との間に数段階の変遷過程を有するから、戦国後期という可能性も除いてよいであろう。結局、春秋中期～戦国中期、実年代でいうと紀元前7～4世紀のいずれかの時点という限定を加えるのが今のところせいっぱいである。

6 雲南青銅器文化の起源をどう考えるか

以上の考察によって、これまで雲南で出土した剣のうち古いものはその西半に片寄って分布し、その中でもとくに古いものは西北端から四川省西部へと続いて分布するだけでなく、中国北方に広く分布する、いわゆるオールドブロンズと共通する要素を数多く有することが明らかになった。この事実は、雲南青銅器文化の起源が中国北方にあって、その文化が中国中原文化の勢力圏を避けて迂回しつつ川西高原を経て雲南に流入し、まずその西部（滇西）に定着し、次いで東部に中心を移して石寨山を中心に開花したと説明するのにうってつけである。

しかし、筆者はこのような説明が完全に正しいとは考えない。まず第一に指摘されなければならないのはオールドス方面と川西高原の間には甘粛の農耕文化地域が西に向って張り出しており、前者から後者への単純な伝播を想定しにくくしていることである。また、中国北方の剣と川西、滇西の剣が似ているからといって、前者から後者への伝播を断定することには論理の飛躍があることである。後者から前者への伝播であるかもしれないし、第三の地域から両方へ伝わったのかもしれない。あるいは両地域が相互の影響関係を保ちつつ並行して変化したのかもしれない。従って、現在の段階でいえることは、中国中原の文化圏をとりまくドーナツ状の地域にかなり強い横の文化的つながりが存在したということにすぎず、雲南と中国北方の剣の類似は、その一端として存在したことになる。もっとも、上記したような雲南における古段階の剣の西古東新の分布は、雲南がそのようなドーナツ状に広がる類似の剣の発祥地であった可能性を小さいものにしていく。

滇西の劍

四川、雲南の劍に関して第二に注意しなければならないことは、その古い段階において、中国北方に共通する要素とともに、全く独自の要素がはっきりした形で存在することである。たとえば無柄劍、曲柄劍⁹⁷⁾とその文様、Y字形の柄端などである。このような要素の存在は、その系統的由来が単純ではないこと、そしてそこにおそらくは先行する土着の青銅器文化が関与していることを暗示しているように思われる。同様なことは、少しおくれて滇西系統の劍が滇池地区に定着する過程についてもいえる。石寨山第I類型墓には滇西系の劍はみられないし、ほぼ同時期の李家山第1類墓でも、圧倒的多数の滇池地区独自の形制の劍のなかにわずかに滇西系統の劍が入りこんでいるにすぎないのであり、当然、そのような滇池地区土着の劍を成立せしめた先行文化の存在を確実視しなければならないのである。雲南青銅器の本当の起源の究明は、北方に共通する要素の伝播に先だつて滇西地区に存在したであろう青銅器文化（これ自体もっと古い北方の青銅器文化と関係をもつものかもしれないが）、と滇西系の劍の侵入に先だつ、すなわち李家山第1類墓より古い滇池地区の青銅器文化⁹⁸⁾の発見が前提にならざるをえないのである。その実態は現在のところまったく未知の世界に属しているが、前者については劍川県海門口遺跡が問題となり⁹⁹⁾、後者についてはわずかに昆明市王家墩¹⁰⁰⁾で採集された有段実心の銅鏃（片刃の斧）とみなれない形をした戈が今後の発見の予告をしているようにみえる。

しかしながら、今後そのような先行文化の実態が明らかにされていったとしても、戦国時代頃の雲南の青銅器が著しく西高東低の分布を示すという現在の傾向が大きく変ることはありそうもない。従って、この時期における北方あるいは第3の地域からの文化的影響が、滇西地域における青銅器生産を促すような何らかの作用をもたらしたと考えなければならないであろう。

雲南の青銅器については、これまでも少なからざる研究者によって、北方の青銅器との類似が指摘されてきた。雲南自体をとりあげたわけではないが、戦前にハイネ＝ゲルデルン氏はヴェトナムのドンソン文化の青銅器と東ヨーロッパ、西アジアの青銅器の近似性を指摘し、これが東ヨーロッパから東アジアへ侵入した民族移動によってもたらされたものであると主張した¹⁰¹⁾。その民族移動は、東ヨーロッパに発し、多くの民族を巻きこんで東進し、東アジアに入ると3分して、一部はオルドスに、一部は中国本土に、一部は南進して雲南経由でヴェトナムに達し、ドンソン文化を開花させたというのである。その民族移動があったのは、スキタイ人がその移動経路をさえぎる紀元前7世紀より前のことであるという。1950年代後半に雲南で発見、調査された石寨山古墓群は、彼がドンソンへの民族移動の経路と考えた雲南に位置するばかりでなく、その文化にスキート＝シベリア的な動物闘争のモチーフが多く用いられていることはとくに注目され、山本達郎氏¹⁰²⁾、ピラツォーリ＝セルストヴァン女史¹⁰³⁾、白鳥芳郎氏¹⁰⁴⁾らによってその類似が指摘されている。これは一見、ハイネ＝ゲルデルン氏の説に似ているが、全く別の考えである。なぜなら、彼はスキタイの影響を認めず、スキタイ以前に民族移動があったとしているからである。

これらとは別に、より考古学的な観点から、鄭徳坤氏は四川省理番の石棺墓群出土の青銅器について、オルドス青銅器を含むスキートシベリア文化の青銅器との一般的類似性を指摘し¹⁰⁵⁾、張光

直氏もそれに同意している¹⁰⁶⁾。高浜秀、童恩正両氏により、雲南の剣の一部といわゆるオールドスの剣の一部に強い近似性があることが指摘されていることはすでに記した。そのような剣の類似は、小論で整理したように、ハイネ＝ゲルデルン氏が民族移動を主張した時代よりも後で現れたことなので、彼の説の裏づけにはならない。スキタイ系文化と雲南の剣の関係については、F1類の剣を仲介として、かろうじて一脈のつながりが認められるかもしれないが、過大評価はできないであろう。スキート＝シベリア系文化とのつながりの証拠としてしばしばとりあげられる石寨山の動物闘争文についても、筆者はそのつながりの可能性を認めるものの、やはり過大評価はできないと思っている。なぜなら、それがもっとはっきりと現れてもいい雲南西部や四川省西部の石寨山に先行した文化に、動物闘争文が存在した証拠は、今のところひとつもあげられていないし、滇池地区においても、石寨山第Ⅰ類型墓にはこの種のモチーフは少なく、前漢中頃の石寨山第Ⅱ、第Ⅲ類型墓で盛行するのである¹⁰⁷⁾。

一般論としていうならば、文化要素の一部の近似性を過大評価して、大河のごとき文化伝播論を作りあげてを自戒しなければならないと思う。土着の文化要素の伝統と新たに侵入した文化要素をはっきりと区別し、それぞれを正當に評価すること、それを時間の流れの中にきちんと整理してゆく秩序だった研究がはじめて雲南青銅器文化の起源と形成について本當の解答を与えるであろう。

あ と が き

筆者はかつて東南アジア先史文化の実年代を考古学的方法で推定するために銅鼓の編年研究を行ない、その視点を東南アジアから雲南へと移していった。今回は銅鼓編年の最古の部分の裏づけるために滇西の剣をとりあげ、その系統を追って、雲南西部から四川西部へと中原文化の領域を迂回するように北上し、中国北部の剣へと視点を移してきた。先述のように、これまでも雲南の剣といわゆるオールドスの剣の類似が指摘されてきたが、その変化を時間的、空間的に整理しつつここに至ったことによって、研究を単なる類似性の指摘の段階から一歩進めることができたと思っている。一言で言えば、現在雲南で知られている最古の一群の短剣において、中国北方との類似がもっともはっきりと認められるのである。

このような人口の稀薄な高地における文化の交流について考えるとき、いつも思い出されるのは、学生時代に歩いたヒマラヤのアンナプルナ山群のふもとで見た隊商の姿である。数十頭のろばに荷を負わせ、鈴を鳴らしつつ、ヒマラヤ山脈を断ち割ったようなカリガンダキの谷をチベットめざして進む隊商の姿に、文化とはこのようにして伝えられるものなのだろうかとの深い感慨をもった。ヒマラヤ山脈でさえも文化の伝播の障害にはならないことを知った。人口の少ない土地では、人間による伝播の阻害や吸収や変形が少ないのではないかと、交易のためには長距離を行かねばならず、そのためにかえって遠くまで文化が伝達されることになるのではないだろうかとも考えた。

もちろん現在の隊商と紀元前の文化の交流を同一視するわけにはいかないし、中国北方と雲南の

滇西の劍

青銅器の類似の原因を実証的に論じるだけの資料もない。しかしその類似のありかたが、多数の項目にわたりながらも、けっして同一とはいえない一般的類似の域を出ないということは、その文化の伝播の原因を大規模な民族の移動に求めるよりも、比較的小規模な文化交流の蓄積に求めるほうが妥当であることを示しているように思われるのである。

そしてこの文化交流の背景として、遊牧生活という共通の生活形態の広がりとその移動性の高さを推定してもよいであろう。史記西南夷列伝に次のような記事がある。「其外，西，同師より以東，北は楛榆に至る，名は襍，昆明，皆編髮，畜に随い遷徙し，常する処母く，君長母し」このような記事の信頼性についてはしばしば問題にされる場所であるが，戦国～前漢頃に滇西地区に遊牧民が生活していたことは認めてよいであろう。滇西の遺跡から出土する短劍，鈴（鐸），飾り金具，カップのような把手つきの小型壺なども遊牧民的な文化との関連を示唆する資料である。

小論でもとりあげた四川省北西部の茂汶県城関遺跡では，副葬品として子安貝などの海の貝がたくさん出土しているが，これは石寨山や李家山の貯貝器に貯えられていた大量の子安貝を連想させずにはおかない。その産地の第1候補はトンキン湾方面である。少なくともこの地の住民と千数百kmも離れた海岸部の人々との間に何らかの交渉があったことを示す動かぬ証拠である。雲南とオールドス方面を結んだのと同じような文化的つながりが，雲南とインドのアッサム方面との間にも存在したことは十分に予想されることである。アッサムは考古学的には空白地帯であって，その交流を証明するものは何もないが，雲南省徳欽県とアッサムの平野部の距離はわずかに300km，オールドスとの距離の5分の1にすぎない。蜀国の産物がインドにもたらされていることを大夏で知った張騫が蜀とインド間に道を開くよう漢の武帝に奏上したという史記の有名な記述もある。

ネパールでは隊商のほかにも色々なものに驚ろかされた。たとえばネパール中どこでも見られるとがり底の籠である。人々は輪にした紐を籠と自分の額とにかけわたして背負っている。またひとつは，婚礼の宴の料理が盛られ供されるやつでのような葉である。どちらも全く同じ情景を石寨山の銅器上に鑄出された人物像¹⁰⁰⁾の中に見ることができる。このような習俗がどのような地域に広がっているのかを調べてみたいと思ったまま未だに果していないがネパールで見たそれらと二千数百年前の雲南のそれらが無関係とは思えないのである。

注

- 1) 雲南省を東西に分けた場合，西半を滇西と呼ぶとしても，東半を滇池地区と呼ぶことは適当でない。しかし雲南省東部における青銅器～初期鉄器文化の発見地は滇池周辺に集中しているので，小論では滇西地区と滇池地区を対比する形で論を進める。
- 2) 高浜秀，1977，四川，雲南の劍をめぐって，Museum 312号
- 3) 童恩正，1977，我国西南地区青銅劍的研究，考古学報1977年2期
- 4) 張增祺，1983，略論滇西地区的青銅劍，考古1983年7期
- 5) 今村啓爾，1973，古式銅鼓の変遷と起源，考古学雑誌59巻3号
- 6) 汪寧生，1978，試論中国古代銅鼓，考古学報1978年2期

今村啓爾

- 7) 李偉卿, 1979, 中国南方銅鼓の分類和断代, 考古1979年1期
- 8) 王大道・肖秋, 1982, 論銅鼓起源于陶釜——兼論最早類型銅鼓, 『古代銅鼓學術討論會論文集』
- 9) 張世銓, 1982, 論古代銅鼓的分式, 『古代銅鼓學術討論會論文集』
- 10) 胡振東, 1982, 試論中国古代銅鼓的体系及其關係, 『古代銅鼓學術討論會論文集』
- 11) 雲南省博物館文物工作隊・四川大学歴史系考古專業七四級學員, 1978, 雲南省楚雄県万家壩古墓群発掘簡報, 文物1978年10期
雲南省文物工作隊, 1983, 楚雄万家壩古墓群発掘報告, 考古学報1983年3期
- 12) 『古代銅鼓學術討論會論文集』(1982, 北京)の「紀要」で銅鼓起源論の現状について概観し, 次のように結んでいる。「要するに, 銅鼓の起源に関しては, 比較的多くの学者の見方が炊具にはじまるというもので, とくに銅釜に起源するという考えかたが多くの人から重視されている。」
- 13) 雲南省文物工作隊, 1964, 雲南祥雲大波那木柳銅棺墓清理報告, 考古1964年12期
- 14) ヴェトナム歴史博物館, 1975『ヴェトナム発現のドンソン銅鼓』(ヴェトナム語)
- 15) 松本信広, 1965, 古代インドシナ稲作民宗教思想の研究——古銅鼓の文様を通じて見たる——松本信広編『インドシナ研究』
- 16) 今村啓爾, 1979, プレI式銅鼓について, 『考古学研究ノート』(東京大学考古学研究室)
- 17) 雲南省博物館, 1981, 近年来雲南出土銅鼓, 考古1981年4期
- 18) Pham Minh Huyen, 1981, 中国で発見された古い年代を有するドンソン銅鼓, 考古学1981年4号(ヴェトナム語)
- 19) 注8)
- 20) 童恩正, 1983, 試論早期銅鼓, 考古学報1983年3期
- 21) 中国社会科学院考古研究所編著, 1983, 『中国考古学中碳十四年代数据集』より抜粋
- 22) 注11の上
- 23) 注11の下
- 24) 注16)
- 25) 注3)
- 26) 注4)
- 27) 雲南省博物館文物工作隊, 1975, 雲南德欽永芝発現の古墓葬, 考古1975年4期
- 28) 同上
- 29) 雲南省博物館文物工作隊, 1983, 雲南德欽県石底古墓, 考古1983年3期
- 30) 注4)
- 31) 雲南省博物館文物工作隊, 1983, 雲南寧蒗県大興鎮古墓葬, 考古1983年3期
- 32) 注3)
- 33) 楊益清, 1966, 雲南大理収集到一批漢代銅器, 考古1966年4期
- 34) 同上
- 35) 同上
- 36) 同上および注3)
- 37) 注4)
- 38) 注13)
- 39) 注4)
- 40) 注4)
- 41) 注4)
- 42) 注11)
- 43) 注4)
- 44) 雲南省文物工作隊, 1965, 雲南安寧太極山古墓葬清理報告, 考古1965年9期

滇西の劍

- 45) 雲南省博物館文物工作隊, 1980, 雲南呈貢龍街石碑村古墓群發掘簡報, 文物資料叢刊 3
- 46) 雲南省博物館考古發掘工作組, 1956, 雲南晉寧石寨山古遺址及墓葬, 考古學報1956年 1 期
雲南省博物館, 1959, 『雲南晉寧石寨山古墓群發掘報告』
雲南省博物館, 1959, 雲南晉寧石寨山第三次發掘簡報, 考古1959年 9 期
雲南省博物館, 1963, 雲南晉寧石寨山古墓第四次發掘簡報, 考古1963年 9 期
- 47) 雲南省博物館, 1975, 雲南江川李家山古墓群發掘報告, 考古學報1975年 2 期
- 48) Janse, O. 1931 Un group de bronzes anciens propres à l'Extrême-Asie méridionale. Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities No. 3
- 49) 石棉縣文化館, 1982, 四川石棉縣考古調查, 考古1982年 2 期
- 50) 寶興縣文化館, 1978, 四川寶興出土的西漢銅器, 考古1978年 2 期
- 51) 同上
- 52) 同上
- 53) 馮漢驥・童恩正, 1973, 岷江上遊的石棺葬, 考古學報1973年 2 期
- 54) 同上
- 55) 四川省文管會・茂汶縣文化館, 1983, 四川茂汶羌族自治州石棺葬發掘報告, 文物資料叢刊 7
- 56) 安志敏, 1978, 四川甘孜附近出土的一批銅器, 考古通訊1978年 1 期
- 57) 注 3)
- 58) 注53)
- 59) 注53)
- 60) 注 2)
- 61) 柄と劍身の成分が異なることは化学分析によって確かめられている(注 2 の文献)。山字形格劍には柄と劍身が別々に作られたものがあり(注49の文献), 成分が異なることは必ずしも後世のはめこみの証拠とはならないが, 劍身の形が他の山字形格の劍と全く異なっている。
- 62) 注 4)
張增祺, 1982, 雲南銅柄鉄劍及其有關問題的初步探討, 考古1982年 1 期
- 63) 万家壩の簡報(注11)では, この種の劍と山字形格劍がともにⅡ類墓から出土するものとされた。しかるに本報告(注11)では, 山字形格劍をⅠ類墓の遺物, この種の劍をⅡ類墓の遺物というように訂正された。なお, この両者が 1 個の墓で共存した例はない。
- 64) 杜恒, 1976, 試論百花潭嵌錯図象銅壺, 文物1976年 3 期
- 65) 同上
- 66) 伝淑敏, 1980, 四川簡陽出土的戦国青銅器, 文物資料叢刊 3
- 67) 注15)
- 68) 注15)
- 69) 雲南省博物館, 1959, 雲南晉寧石寨山古墓群發掘報告
- 70) 雲南省博物館, 1964, 雲南晉寧石寨山古墓群出土銅鉄器補遺, 文物1964年12期
- 71) 注 5)
- 72) 大理州文物管理所・祥雲縣文化館, 1983, 雲南祥雲檢村石槨墓, 文物1983年 5 期
- 73) 雲南省博物館文物工作隊, 1983, 雲南德欽縣納古石棺墓, 考古1983年 3 期
- 74) 注27)
- 75) 注 3)
- 76) 甘孜考古隊, 1981, 四川巴塘, 雅江的石板墓, 考古1981年 3 期
- 77) 寶興縣文化館, 1982, 四川寶興縣漢代石棺墓, 考古1982年 4 期
- 78) 注55)
- 79) 茂汶羌族自治州文化館, 1981, 四川茂汶營盤山的石棺葬, 考古1981年 5 期

- 80) 注29)
- 81) 注31)
- 82) 涼山彝族自治州博物館, 1981, 米易彎丘的兩座大石墓, 考古学集刊 1
- 83) 注53)
- Chêng Tê-Kun (鄭德坤) 1946 The Slate Tomb Culture of Li-fan. Harvard Journal of Asiatic Studies vol. 9-2
- 84) 西昌地区博物館, 1978, 西昌河西大石墓群, 考古1978年 2 期
- 85) 注31)
- 86) 注73の文献中の注による
- 87) 注 3)
- 88) 張增祺, 1981, 滇西青銅文化初探, 『雲南青銅器論叢』
- 89) 遼寧省寧城県南山根に類似の柄を有する刀子があるが, 比較の対象とするには年代が離れすぎている。
遼寧省昭烏達盟文物工作站・中国科学院考古研究所東北工作隊, 1973, 寧城県南山根的石榴墓, 考古学報 1973年 2 期
- 90) 注66)
- 91) 烏恩, 1978, 関于我国北方的青銅短劍, 考古1978年 5 期
- 92) 高浜秀, 1983, オルドス青銅短劍の型式分類, 東京国立博物館紀要18号
- 93) 鄭紹宗, 1984, 中国北方青銅短劍の分期及形制研究, 文物1984年 2 期
- 94) 注92)
- 95) 河北省文化局文物工作隊, 1966, 河北懷来北辛堡戦国墓, 考古1966年 5 期
- 96) 注89)
- 97) 曲柄の短劍は中国北方の殷~西周前期頃にも存在するが, 柄が曲っているという以外の共通性はなく, 比較するには年代も離れすぎている。
- 98) 王大道氏は滇池地区の文化を 4 期に分け, 李家山や石碑村は第 1 期からはじまるが, 石寨山には第 1 期に属する墓はなく, 第 2 期から始まるとした(滇池地域の青銅文化, 1981, 『雲南青銅器論叢』)。彼が各時期の標準遺物としてあげたものは, 確かに流行期が少しずつずれている可能性があるが, 報告書で個々の事例にあたってみると, たとえば彼が第 1 期の標準遺物とするものが, 彼が第 2 期, 第 3 期に分類した墓から出土しているといった事例が少なくなく, 説得力のある時期区分にはなっていない。
これより前, 梶山勝氏は石寨山を中心とする雲南青銅器文化の時期区分の再検討を行ない(雲南省青銅器文化に関する一私見——石寨山古墓群の再検討を手懸として——1978, 『小林知生教授退職記念考古学論文集』), 滇池地区の墓のうちでは太極山12号墓が石寨山第 1 類型墓以前にさかのぼるものであるとしている。この墓の副葬品は, 劍, 矛, 戈が各 1 点あるだけである。この戈について梶山氏は「いわゆる中国戦国時代の戈を想起させ」と述べるが, 結局のところこの戈は中国西南部独得の形であって, 中原の戈の変遷中に位置づけることは難しい。石寨山, 李家山に同じものがないことから, それに先行するという見方もありうるが, 筆者としてはペンディングとしておきたい。
- 99) 滇池地区ではこの遺跡で出土した銅器類が, 放射性炭素測定値によって (Table 1 参照) 古いものとされている。出土した銅器がすべて紫銅製で, 斧類以外は鍛造とみられていることもこれを裏づけるものであろう。しかし, 考古1983年11期王大道氏論文中に図示された銅斧の鑄型は大波那出土の斧とよく似たものであって, 近い時期のものと考えざるをえない。おそらく時間幅のある遺物が出土しているものと思われるが, 簡単な報告しか発表されていないので詳細は不明である。(雲南省博物館籌備所, 1959, 劍川海門口古文化遺址清理簡報, 考古通訊1958年 6 期)
- 100) 李永衡・王涵, 1983, 昆明市西山区王家墩發現青銅器, 考古1983年 5 期
これについてはすでに王大道氏が石寨山文化に先行するものであると述べている。注98) の文献
- 101) Heine-Geldern, R. 1937 L'art prébouddhique de la Chine et de l'Asie du Sud-Est et son influence

滇西の劍

en Océanie. Revue des Arts Asiatiques. Tome 11-4

Heine-Geldern, R. 1951 Das Tocharerproblem und die Pontische Wanderung. Saeculum vol. 2-2

102) 山本達郎, 1974, 石寨山文化の一側面, 東南アジア——歴史と文化—— 4号

103) Pirazzoli-t'Serstevens, M. 1974 La Civilisation du Royaume de Dian à l'Époque Han. Publication de l'École Française d'Extrême-Orient, vol. 94

104) 白鳥芳郎, 1977, 石寨山文化に見られるスキタイ系文化の影響, 江上波夫教授古稀記念論集(民族・文化篇)

105) 注83)

106) Chang Kwang-chin 1968 The Archaeology of Ancient China

107) 梶山勝氏が指摘するように(注98の文献), 石寨山第Ⅰ類型墓には動物闘争のモチーフはみられない。ただし李家山20号墓では山字形格第3期の劍ともに出ているから, 石寨山第Ⅱ類型墓より前に全くなかったとはいえないであろう。

108) M13: 2 趕集場面貯貝器, これは滇王に貢納に来た諸部族の情景を表現したものとみられ, 馮漢驥氏は問題の籠を背負った人物を北西遊牧氏の従者と考えている(雲南晋寧石寨山出土文物的族属問題試探, 考古1961年9期)

M12: 2 銅鼓形貯貝器

追記

小論脱稿後, 古代オリエン特博物館において「雲南博物館青銅器展」が開催され, 今まで報告書でしか接することのできなかつた青銅器類の実物を観察する機会を得るとともに随行された現地の学者たちから多くの貴重な御教示を得ることができた。このような機会を与えて下さった古代オリエン特博物館館長江上波夫先生, 林俊雄氏, ならびに雲南省博物館の孫太初, 闕勇, 高宗裕, 王大道, 李昆声, 雲南省文化庁の胡振東の諸先生に感謝申しあげる次第である。

この展覧会に際して開かれた講演会において, 闕勇氏は「雲南新石器文化と滇西青銅器文化」と題して講演され, 滇西青銅器文化が基本的に滇西新石器文化から生れたものであることを強調されるとともに, その成立に際して北方からの影響があったと述べられた。また量博満氏は「考古学より見た雲南」と題して講演され, 中国の縁辺部では, 通時代的にドーナツ状の文化交流が認められると論じ, 青銅器時代におけるその例として, 山字形格劍, 触角式の把を有する劍の分布について指摘された。王大道氏は雲南の初期青銅器と北方の青銅器の関係を考察した論文を執筆され, 近日中に発表されるとのことである。また, 闕勇氏は劍川爨鳳山遺跡の資料(雲南社会科学動態1981年7期)について御教示下さったが, 小論には利用できなかった。

Swords and Daggers of Dian-xi

Keiji IMAMURA

Introduction

Dian-xi (滇西) denotes the area to the west of Dian Lake (滇池), or western part of Yunnan (雲南), where many characteristic bronze tools have been discovered. Among them, bronze drums of "pre-Heger I type" (author's term) and certain types of swords and daggers, with which this paper deals, are remarkable. In 1973 the author made typological and chronological studies on bronze drums of Southeast Asia and southern China, and classified the drums of Tung-lam, northern Vietnam and Da-bo-na (大波那), Dian-xi into a type preceding Heger I. Then he expressed the opinion that the oldest drums had originated from pot-shaped bronze vessels turned upside down, because there were evidences that the early drums had been used often in reversed position and because they have strong similarities to pots such as a bulging head and small percussion plate and others. These features disappeared in the later types. After publication of that paper, many drums belonging to the same type have come to light and the concept of the type has been widely accepted, although under differing names. Drums of the earliest type unearthed from Wan-jia-ba (万家壩) with traces of exposure to fire, reinforced the hypothesis on their origin. The recent discoveries, however, raised new questions. One of them is that most of the drums of pre-Heger I were unearthed from western Yunnan (Fig. 1), an area once regarded as distributional frontier of Heger I. The distribution seems to indicate that "pre-Heger I" was in fact a local undeveloped type and existed contemporaneously with early Heger I. The first aim of the present paper is to confirm the chronological positions of early drums by the chronology of swords and daggers.

1. Chronology of sword/daggers with three-pronged guard

Many swords and daggers with three-pronged guard resembling the Chinese character "山" and with oval cross-sectional hilt have been collected from Yunnan and western Sichuan (四川). These are divided into six serial groups or phases by the development of the guard as well as by decorative patterns on the hilts (Fig. 6). From the fourth phase on, the sword/daggers of Yunnan and Sichuan show each distinctive local colour (Fig. 7).

2. Considerations derived from the above chronology

Counting the number of reported specimens by areas as well as by phases (Table 2) shows a remarkable tendency, the older ones concentrating in the west (Dian-xi area) and the later ones concentrating in the east (Dian Lake area). This tendency surely corresponds with the above-mentioned distribution trend of bronze drums of pre-Heger I and Heger I.

Specimens of the second phase were excavated with bronze drums of pre-Heger I type in the tombs of Da-bo-na and Wan-jia-ba, and those of the third, fourth and fifth phases co-existed with bronze drums of Heger I type in Shi-zhai-shan (石寨山) and Li-jia-shan (李家山).

Consequently, drums of pre-Heger I are proven older than those of Heger I. Also, drums of pre-Heger I and the early drums of Heger I were produced almost at the same time in spite of remarkably different casting techniques. Advanced technique must have been introduced with the appearance of Heger I. Among the features of Heger I are realistic figures of men and animals by intaglio-like representation and patterns of tangent spirals with attached branch spirals (Fig. 9 right). The same way of representation and similar designs are seen on some bronze vessels of the Warring States period. A good example is a pot "hu" (壺) regarded as a product of eastern Sichuan, an area situated on a possible transmission route of new bronze technology.

Table 2 also shows the numbers of two categories of sword/daggers; one is entirely made of bronze, another consists of an iron blade and a bronze hilt. These two categories show rates of different frequency in eastern Yunnan, western Yunnan and western Sichuan in every phase. The table makes us realize that iron tools came into use first in western Sichuan, next in eastern Yunnan and lastly in western Yunnan. But iron metallurgy itself seems to have entered from eastern Sichuan, as is the case with the new bronze technology.

3. Pottery chronology

There are other types of sword/daggers than those with three-pronged guard. They are difficult to place in the above chronology only by their typological features. Therefore, we have to examine the pottery unearthed with the sword/daggers. From a view-point of typological changes, we can assume the pottery sequence: Na-gu (納古) ……Yong-zhi (永芝) ……Shi-di (石底) ……Da-xing-zhen (大興鎮). The order of the last three accords with the chronological positions of the sword/daggers with three-pronged guard from each site. Thus

the daggers from Na-gu are older than or at least as old as the first phase of sword/daggers with three-pronged guard from Yong-zhi.

4. The earliest daggers

Because of co-existence with similar daggers or pottery to those from Na-gu and Yong-zhi, the daggers from the following sites are considered to be the earliest so far known; Na-gu, Yong-zhi and Long-tan (龍潭) in western Yunnan, Zha-jin-ding (扎金頂), Cheng-guan (城關) and Wu-long-gong-she (五龍公社) in western Sichuan. Among these early specimens there are none long enough to be called a sword. They are various combinations of many elements, and this variety is not to be regarded the result of a long time sequence, but a characteristic of early daggers. In the variety we recognize many elements common to the daggers of northern China, the so-called Ordos bronzes. They are flat hilts, double-bar shaped hilts, hilts with spiral decoration, T-shaped pommels, double-disc shaped pommels and decorated guards. It is most important to note that all the specimens are short like Ordos daggers.

5. Absolute dates

We can give absolute dates for the third and later phases of the sword/daggers with three-pronged guard by associated datable artifacts, especially coins: the 3rd phase.....3rd to early 2nd century B. C., the 4th phase.....2nd century B. C., the 5th phase.....late 2nd to early 1st century B. C. It is difficult to date the earlier phases by associated artifacts. Since the earliest daggers predate the 3rd phase, these are at least earlier than the 3rd century B. C. In spite of general similarities to northern Chinese daggers, they have no resemblance to those of Nan-shan-gen (南山根), Liao-ning (遼寧) province, dated to the early Spring and Autumn period, and so they seem to be later than the 7th century B. C. Future progress in the chronological study of the daggers of northern China and the correlation between northern China and Sichuan-Yunnan will yield more exact dates for the early bronze culture of Yunnan.

6. How to understand the origin of Yunnan bronze culture

We should not conclude, from similarities between the daggers of Yunnan and those of

northern China, that the former have originated from the latter. We must consider the possibility of an opposite direction of diffusion or a spread from a third area. We may be allowed to suppose that there were cultural connections in a doughnut-shaped area surrounding the culture of the Central Plains, and that Yunnan was a link in the cultural chain. We should also note the presence of special characteristics not common in northern China even in the earliest daggers.

They appear to be traces of an earlier bronze culture proper to this area which existed there prior to the influence from the north or from a third area. It is difficult to discuss the real origin of the bronze culture of Yunnan before discovery of the earlier bronze cultures, which preceded Na-gu and the related sites in the Dian-xi area, and earlier than Li-jia-shan and Shi-zhai-shan in the Dian Lake area. Some bronzes from Hai-men-kou (海門口), Dianxi area and Wan-jia-gu (王家墩), Dian Lake area seem to belong to such early stage. They are, however, too scarce to indicate the features of the preceding culture.

Postscript

About ten years ago, the author travelled in Nepal and saw caravans going across the Himalaya Mountains to Tibet. It taught him that even high mountains cannot prevent the flow of culture. A Chinese historical book "Shi-ji" (史記), written during the Western Han period, records that nomadic people lived in western Yunnan. In fact, some kinds of artifacts like daggers, bells, bronze ornamental plaques and small pots with handles excavated from the sites, suggest the presence of such a way of life. The extensive distribution of nomadism as a common way of life and the mobility of the nomadic people may be counted among the causes of cultural communications discussed in this paper.

List of Figures and Tables

- Fig. 1 The distribution of bronze drums of pre-Heger I type (○) and Heger I type (●)
- Fig. 2 Terms for parts of swords and daggers.
- Fig. 3 Classification by E. Tung (1977)
- Fig. 4 Classification by Z. Zhang (1983)
- Fig. 5 Distribution of swords and daggers in the Dian-xi tradition.
- Fig. 6 Shapes of guards and designs on the hilts of six phases of sword/daggers with three-pronged guard.
- Fig. 7 Sword/daggers with three-pronged guard. Comparison between Yunnan and Sichuan.
- Fig. 8 Sword/daggers classified as type II-1 at Li-jia-shan (李家山)

今 村 啓 爾

- Fig. 9 Rubbing of designs on a bronze "hu" (壺) of Gu-gong (故宮) Museum (left) and the lid of a cowrie shell container from Shi-zhai-shan (right).
- Fig. 10 Pottery from Na-gu (above) Yong-zhi (center) and Shi-di (below)
- Fig. 11 Pottery from Da-xing-zhen (above) and Zha-jin-ding (below)
- Fig. 12 Pottery from Cheng-guan.
- Fig. 13 The oldest daggers so far known in Yunnan and west Sichuan (except 15 and 16)
- Fig. 14 Daggers from Wu-long-gong-she.
- Fig. 15 Daggers from Wu-long-gong-she.
- Fig. 16 Classification of Ordos bronze daggers by S. Takahama.
- Fig. 17 Classification of Ordos bronze daggers by S. Takahama.
- Table 1 Radiocarbon dates from the sites concerned.
- Table 2 Numbers of sword/daggers with three-pronged guard, according to phases (1st to 6th phases), by areas (east Yunnan, west Yunnan, east Sichuan and west Sichuan) and material (whole bronze, iron blade with bronze hilt, whole iron)